

新発田の歴史物語・卓話集発刊によせて

[2025 ~ 2026 年度] 新発田ロータリークラブ 会長 田上 正幸

目次

- Lecture 1 総論 細野孝司…2
- Lecture 2 縄文時代・弥生時代の新発田 鈴木暁…10
- Lecture 3 佐々木加地一族の祖、佐々木盛綱の足跡を探る
長浜光雄…17
- Lecture 4 溝口家と城 鈴木秋彦…24
- Lecture 5 正保越後国絵図 鶴巻康志…31
- Lecture 6 土橋門復元 吉井千恵…38
- Lecture 7 新発田城の瓦 石垣義則…46
- Lecture 8 水に浮かぶ新発田城 渡邊明紀…54
- Lecture 9 近年の発掘成果 津田憲司…64
- Lecture 10 戊辰戦争と新発田藩 大沼長栄…71

進行

新発田ロータリークラブプログラム副委員長 猿子公司

編集

新発田ロータリークラブプログラム委員長 阿部聡

財務

新発田ロータリークラブ社会奉仕委員長 渡邊修士

新発田ロータリークラブは、1957年5月3日に国際ロータリー加盟の承認を受けて発足しました。2026年5月から、創立70年目に入りました。

2025～2026年度は創立してから第70年度であり、一つの区切りの年度ですので「承前啓後～歴史を引き継ぎ未来を開く～」をテーマに掲げました。その中で、例会内の卓話の時間に、10回にわたり縄文時代から戊辰戦争までの「新発田の歴史」に関するお話をしていただきました。

私たちは、先人たちが築いてきた歴史の上に成り立って、現在に生きています。歴史の連続性を意識することは、現在を生きる者が未来への使命を感じることにもつながると思います。

今回、30分間の貴重な「ふるさと新発田」の歴史のお話を10回にわたり聞くことができました。その内容を冊子にまとめ、新発田市内の小学6年生などに配布させていただきます。貴重な新発田の歴史のお話を冊子として残すことができ本当に良かったと思います。この冊子が、子どもたちが新発田の歴史に関心を持つきっかけになれば幸いです。

お話の内容を正確に伝えることが大切であると考え、なるべく原文を生かしましたので、小学6年生には少し難しい内容になっているかもしれません。そこで、可能な限り読み仮名をふったり、図や写真を多く使いました。お家の方や先生方と一緒に楽しんでいただければ、これに勝る喜びはありません。

最後になりましたが、卓話で新発田の歴史についてお話くださった新発田市教育委員会文化行政課の皆様と郷土の歴史に詳しい長浜光雄、鈴木秋彦、渡邊明紀、大沼長栄の各氏に心から御礼申し上げます。

この度新発田ロータリークラブ様から来年創立70周年を迎えるにあたり、市の教育委員会に、改めて地元新発田の歴史を再認識したいというお話をいただきました。それでこの8月から来年1月まで歴史図書館と文化行政課で受け持たせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。本日は第1回、通史ということで、古代から現在までをまとめた映像、新発田藩主溝口秀勝、江戸時代の教育者丹羽伯弘、大倉喜八郎の3名を紹介する映像をご用意しています。まずはそちらをご覧ください。

*

新潟県北部は、全国有数の穀倉地帯です。信濃川と阿賀野川の流域には、蒲原平野とも呼ばれる越後平野が広がり、飯豊連峰を望む新発田市が新潟県北部、阿賀野川の北に位置しています。

古くから新発田は、北陸や東北からの影響を受けてきました。福島県の会津、山形県の置賜・庄内とは、文化や経済の面で強く結びついています(図1)。新発田で発見された最も古い遺跡は、およそ2万6千年前の旧石器時代に遡ります。

縄文時代には小さなムラができます。川東、菅谷、赤谷など加治川の本支流域から、土器を使用した生活の跡が多く発見されています(図2)。

飛鳥時代、7世紀末に、それまでの「越の国」から「越後」の名称が初めて使われるようになります。その後、平安時代の終わり頃、加地荘、豊田荘といった、有力な貴族や寺院の私有地である荘園ができます(図3)。この頃、桓武平氏の流れをくむ城氏が下越の一帯で勢力を誇っていました。鎌倉時代の建仁元(1201)年、城氏は佐々木三郎盛綱に敗れ、滅亡します。源頼朝により、佐々木氏は加地荘を治める地頭となりました(図4)。

新発田周辺地域を治めることとなった佐々木盛綱は、この地域の開発を進めました。佐々木氏の一族は、加地を本家とし、そこから、新発田、竹俣、五十公野、楠川といった分家ことができました(図5)。

記録の上で、新発田の名が初めて登場するのは、室町時代の応永30(1423)年です。

戦国時代の末期、上杉謙信亡き後、越後の主権が争われます。新発田重家は、上杉景勝・直江兼統の軍と7年にわたり戦いました(図6)。天正15(1587)年、新発田氏が滅亡して戦いは終わりました。市内福勝寺には、新発田重家の墓があります。

慶長3(1598)年、豊臣秀吉の命により、溝口秀勝が加賀の国大聖寺からやってきます(図7)。そして戦国時代の新発田重家の館があったあたりを中心に、城下町新発田が作られていきました(図8)。

信濃川と阿賀野川の流域、蒲原平野の湿地帯を水田に変えるため、河川の改修、つまり治水工事が盛んに行われました(図9)。新田開発が進んだ結果、当初5万石だった米の収穫量は、耕作者の定住と水田の増加により、大幅に増えました。しかし一方で、数年ごとに大きな水害が起きるとい、深刻な問題も発生しました(図10)。

新発田は、流通都市としても発達を見せます。例えば、十二斎市という定期市が、月に12回も開かれ、新発田城下は大変な賑わいでした。新発田の流通を支えたのは、水上交通でした。海に開けた沼垂湊から河川を通じて新発田城下へと、人や物が運ばれ、反対に、新発田藩領の米が、大阪などに送られ、換金されました(図11)。

新発田藩は、学問、文化にも力を注ぎます。藩の学校、道学堂(朱子学)は、越後で最も古い歴史を持っています。また、丹羽伯弘により開かれた私塾という民間の学校、積善堂(陽明学)もありました。

明治維新を迎えると、1000人余りの武家は、禄を失いました。藩の経済によって支えられていた城下町は、甚大な打撃を受けました。しかし、歩兵第16連隊の創設などにより、軍都として発展する基盤が確立されました(図12)。新しく官公庁や学校ができ、新発田の町は、北蒲原郡における政治、経済、教育の中心として展開していきます。

大正2(1913)年、加治川分水が完成しました。その翌年、堤の上に3000本のソメイヨシノが植えられ、長堤十里の桜は地域の誇りとなりました(図13)。

また、大正13(1924)年には、新潟と秋田を結ぶ羽越線が全線開通します。人や物資が、鉄道により運ばれるようになります。

大正末期から昭和はじめにかけては、小作争議が激化します。北蒲原郡には、千町歩地主を

始め、数多くの大地主がいました。しかしその下には、多くの零細な小作人がいて、小作条件の改善を求める運動が多数発生しました。

戦後の動乱から、日本全国が立ち直る中で、新発田も復興の道を歩んでいきました。昭和22(1947)年には市制が施行され、昭和30年代前半、昭和の合併が進みました。昭和39(1964)年には、市街地の町名が変更されました。平成に入り、再び市町村の合併が進みます。平成15(2003)年には豊浦町を、平成17(2005)年には紫雲寺町、加治川村を編入し、新発田の人口は10万人を超え、城下町の歴史文化や、山から海まで、豊かな自然を併せ持った、魅力あふれる町になり、これからも発展していきます。

新発田藩初代藩主 溝口秀勝

溝口秀勝は、天文17(1548)年、尾張の国・中島郡西溝口村の地侍、溝口勝政の長男として生まれました。武将への道を志して郷里を後にした秀勝は、織田信長の家臣・丹羽長秀に仕えました。天正9(1581)年、信長は5000石を秀勝に与え、若狭の国・高浜城主に任じました(図14)。

天正11年(1583)年、賤ヶ岳合戦で秀勝は柴田勝家軍を破ります。天正13(1585)年、主君・丹羽長秀が病で亡くなると、秀勝は豊臣秀吉から加賀の国・大聖寺4万4000石の城主に命じられ、独立大名となり、その後十数年間、大聖寺城に在城しました。

慶長3(1598)年、秀吉は上杉景勝を会津に移したあと、代わって越前・北ノ庄の堀秀治を春日山城、現在の直江津に移し、秀勝は堀氏を助ける与力大名として、越後の国・蒲原郡6万石を与えられました。

秀勝は、五十公野に仮の住まいを構えて、領内統治、新発田城の築城、城下町の建設、治水や新田開発に取り組み始めました。その際1000人を超す家臣が、大聖寺から新発田へ移りました。また、商人や農民も移住したと伝えられています。そして、領内最北端にあたる中世の領主、新発田重家の城館の跡に築城しました。

五十公野御茶屋は、秀勝が住まいを構えたと伝えられる地に後年、新発田藩の別邸とし建てられ、会津街道を通して江戸に向かう参勤交代の休み場所としても使われました(図15)。

城下町新発田の礎を築いた秀勝は、慶長15(1610)年に、享年63で没しました。新発田城は、

秀勝が入封した後、56年の歳月を経て3代宣直の時代によりやく完成しました。明治維新後の廃藩置県まで、溝口氏による270年間の統治が続きました(図16)。

藩校道学堂と丹羽伯弘の私塾積善堂

江戸時代、新発田藩では8代直養の時代、越後では一番早く藩校を設置し、道学堂と名付け、藩で教科書を作成し、庶民にも聴くことを許しました(図17)。新発田藩の学問は、朱子学だけ認め、朱子学の教えである思いやりや慈しみのある政治の実現に努めました。

朱子学は2500年くらい前、中国の春秋時代に孔子がまとめた儒教に基づき、800年くらい前、南宋の時代に朱子がまとめた学問です。

丹羽伯弘は、藩から認められ江戸で5年間勉強した人物で、10代藩主直諒は道学堂の先生にしたいと思っていました(図18)。しかし、再び江戸で学んでいるときに、藩で認めていない学問を勉強したため、藩の仕事を辞めることになりました。

伯弘は文政7(1824)年から積善堂という私塾で子どもたちに勉強を教え始めました(図19)。その中には、戊辰戦争で活躍した島潟村の大庄屋・小川心齋、聖籠の諏訪山で絆己楼という塾を開いた大野耻堂がいました。実業家大倉喜八郎も伯弘の息子省齋に学んでいます。明治・大正・昭和の新発田を中心とする北蒲原郡のリーダーたちの多くが、積善堂の学問の流れをくむ人たちでした。

大倉財閥創業者 大倉喜八郎

大倉喜八郎は天保8(1837)年に新発田で生まれた大倉財閥の創業者です(図20)。喜八郎は、当時の武士と商人の区別に矛盾を感じ、両親の死を機に自分の能力を伸ばすために江戸へ出て、商業で身を立てる決心をしました。

最初は鯉節店で働き、わずかなお金を貯めて乾物屋を開きましたが、先を見ることが早かった喜八郎は慶応4(1868)年に起こった戊辰戦争の前年に鉄砲の商売を始め、成功して利益を上げました。

喜八郎が数え年で36歳であった明治5(1872)年から、およそ1年あまりをかけて自費でアメリカ、ヨーロッパを視察しました。そして外国との貿易を始めるため大倉組商會を設立し、大きな利益を上げ、それは後に大倉財閥の基になりました。

喜八郎は、近代日本の基礎作りをした実業家でもありました。国家の行く末を見越し、帝国ホテル、帝国劇場などの中心的な創設者であり、政府の施設である鹿鳴館の施工を手がけました。

また喜八郎は、事業で得た富を教育、文化事業に生かし、大倉商業学校、現在の東京経済大学などを開校したほか、美術品の海外流失を防ぐため大正6(1917)年、日本の私立美術館の第一号である大倉集古館を開館しました。

一代で財を築き、勇猛果敢に時代を生き抜いた大倉喜八郎。昭和3(1928)年、92年の生涯を閉じました。

解説

新発田市立歴史図書館副参事／鶴巻康志

新発田ロータリークラブプログラム委員長／阿部聡

【鶴巻】2本ほど映像資料をご覧いただきました。この映像は歴史図書館が開館する前年、2017年のクレジットが出ていましたが、私どもで作成した映像です。新発田市や歴史図書館のホームページからご覧いただけます。ということで、ご覧になった映像資料は8年前のデータを基に作られておりまして、例えば新発田に移築された蔵春閣のことなどは盛り込まれておらず、この8年間でも歴史に対する評価は変わってきているかなと思います。

歴史図書館の場所をご存じでしょうか。昔市役所があった通りの向かいの、昔の図書館。内井昭蔵さんという方が設計された名建築を改修して歴史図書館としてオープンしています。上に「歴史」が付く図書館は、日本ではここだけです。それだけ新発田の方々が歴史の重要性をご承知いただいているということだと思います。

歴史図書館は歴史に関係する本、新発田藩の歴史資料を特別収蔵庫を作って収蔵し、展示室でも公開しています。年4回展示替えを行っており、今現在は「北を向く越後人」というテーマで、新潟から北海道へ移った方々、新潟と北海道の歴史を掘り下げて展示しています。トキエアという直行便航路が開設されて行き来が楽になったのを機にした展示ですが、実は北海道から本館にご先祖探しに来られる方が結構おられるんですね。NHKファミリーヒストリーという番組で、キャンディーズの伊藤蘭さんの母方の先祖が横山小路の横山伝十郎さんだったなんてことも判明しております。それが関川の伊藤家に嫁いで、そこから北海道の小樽に移られた。番組の中ではここにいる細野館長が絵図面

を広げている映像なども使われました。新潟と北海道の歴史についてご興味のある方はお越しください。この展示の後、10月からは11代藩主、最後から2番目の藩主についての展示を準備していますので、ぜひご覧いただければと思います。

文化行政課からも何人かお話をさせていただきます。文化行政課ではいま、土橋門の復元に向けた調査、資料収集等を行っており、その成果をもとに新発田城に新たな復元が加わるかと思っています。新発田城は、表門を入るとすぐ壁があって、その向こうは駐屯地と、ちょっと物足りないなと思った方もおられるかもしれません。土橋門を復元することによって、観光施設としての新発田城に奥行きが出てきます。城址公園からアイネスしばたままでの間に広い駐車場ができましたので、広範囲に新発田城を見ることができる環境が徐々に整ってきています。市をあげて整備を進めておりますので、皆様からもご指導ご鞭撻をいただければと考えています。

あと10分弱ありますが、先ほどの映像を見てご質問があればこの場で受けさせていただきます。

【阿部】新発田市では縄文以来の遺跡が多く発見され、県の博物館で収蔵されるような重要文化財も出ています。歴史的にはものすごく長い。黒曜石などは日本で一番質がいいなどという話もあって、人物的には佐々木盛綱から始まって有名人では新発田重家、溝口秀勝、堀部安兵衛、大倉喜八郎もありますが、どんどん質問していただくとありがたいです。先ほど地図が出ましたが、信濃川のこちら側はみんな新発田藩だったのでめちゃくちゃ広かったんです。中之島あたりから新発田藩領だった。

【鶴巻】新潟平野のことでは昨年、正保国絵図の実物大のレプリカを作りました。この部屋いっぱいではようやく広げられるような大きさなので、皆様にご覧いただけるように準備しています。中にはご存じの土地がたくさん書き込まれています。ぜひご自身の目でご確認いただきたい。新潟県では新発田だけに「ある」ということを知っていただきたいと思います。

【阿部】国絵図を見ると、素人の私でも分かることが2つあります。一つは紫雲寺湯。真野から稲荷岡に向かい今は一直線に集落がありますが、この内側は紫雲寺湯があったところ。それから村の名前が全部書いてありますが、脇に石高が記載されています。合計すると約5万石ほどです。そのあたりも見ていただければと思います。新発田は歴史を大事にするところで、市長さんも頑張ってきた。その成果がようやく現れてきたところです。



図1



図2



図10 加治川の堤防決壊の図「安政四年島瀉破堤真景」



図11



図3 荘園の成立(平安時代末期)



図4



図12



図13

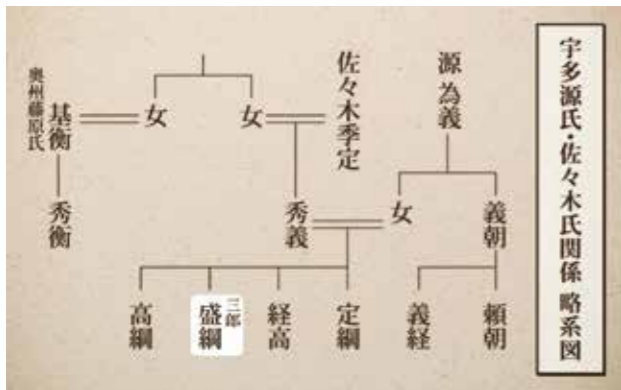


図5



図6



図14



図15



図7



図8



図9 新発田周辺の地形 (17世紀中頃)



図16



図17 藩校「道学堂」の扁額 寛政9年(1797年)8代藩主 直養筆



図18



図19



図20

2 縄文時代・弥生時代の新発田

新発田市教育委員会 文化行政課 埋蔵文化財係 鈴木 暁

本日は縄文時代・弥生時代の新発田ということでお話をします。遺跡調査を行うと多く見つかるのが土器や石器の類いの出土品で、今日は直接ご覧いただければと少し持参しました。なかなか手にする機会がないと思いますので、耳を傾けながらお手に取ってみてください。

持ってきたものの1つは縄文時代の「土偶」という土人形の、顔の部分です。今から3000年ほど前の菅谷地区にある村尻遺跡から出土しました。村尻遺跡は弥生時代の遺跡として知られますが、それよりも前の縄文時代から続く遺跡でもあります。もう一つお持ちした土器に関しては、非常に精巧に模様を彫っているところにご注目いただければと思います。

今ご覧いただいている写真は、加治の要害山から撮影した景色です（図1）。要害山は七葉小学校の裏手にあり、新発田市内のおよそどこからでも見えるランドマークのような場所です。写真には川東・米倉・赤谷の各地区方面が写り、奥は会津方面です。この周辺に縄文時代の遺跡が多く存在します。

これからお話する縄文時代と弥生時代はどのような時代だったのか、教科書の内容に沿って概略を見ていきます。縄文時代は今から1万2000年前くらいから始まって1万年続いたと、小学校の教科書に記されています。ただし近年の研究ではもっと古く始まるという説もあります。どんな暮らしだったかという、「竪穴住居」という、地面をちょっと掘りくぼめた家を建て、動物や魚、貝を獲ったり、クリやドングリ、トチの実などを採って食べており、まだ農業はやっていませんでした。

続いて弥生時代ですが、だいたい2500年ほど前に米作りが伝わって、西暦300年から350年頃に古墳時代に入ります。教科書では「ここからここまで」という明確な記述をしていませんが、弥生時代というとおおよそこの時代です。弥生時代の暮らしぶりですが、大陸から米作りが伝わって、米作りのために集団生活を始め、食糧が安定的に得られることで人口が増え、リーダー

の登場と身分格差が生まれ、集団間の争いもこの頃から生じたと教科書にも記されています。

昭和61年の雑誌に掲載された縄文時代のイメージ図では、裸に毛皮をちょっと着けたような暮らしぶりが想像されていました。ですが、その後に発掘調査の成果も受け、もっとしっかりした暮らしの様子が分かり、イメージが大きく変わっていきました。例えば、平成17年に国立科学博物館が開催した企画展のチラシではきれいな模様の服を着た縄文人が取り上げられており、縄文時代のイメージが、調査研究の進展に合わせて大きく変わってきたということを知っていただければと思います。

さて、ここから本題の新発田市の話に移ります。遺跡とは人間の暮らしの痕跡です。遺跡の特徴は、時代の違いだけでなく、どんな場所にあるかということでも大きく異なります。そこで、初めに新発田市の地理的な特徴を確認しましょう。

衛星写真をご覧ください。新発田市中心部から30km、60km、90kmの同心円を描いたものです（図2）。新潟市とは30km弱、長岡市とは70km程度離れています。福島県の会津若松市とは長岡市までの距離とほぼ同じで、米沢市とも同程度の距離にあり、新発田市は東北地方南部の都市とさほど離れていないことがわかります。

続いて新発田市の近隣の様子を見ていきましょう（図3）。写真の中央には五十公野山、東側には二王子岳を含む飯豊連峰があり、北に櫛形山脈、南に五頭山、西には海岸線が位置し、真ん中を加治川が流れている地形です。

赤谷地区周辺では河岸段丘、新発田市街や川東地区は扇状地、豊浦地区の方面には湯や湿地があり、紫雲寺地区には砂丘があります。市域の中にさまざまな地形があり、それらの地理的環境の中で、時代に合わせて暮らしを営んできましたから、遺跡の様子も多様であると言えます。

さて、縄文時代は1万年間にも渡る長い時代ですので、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期と6つに分けられます。このうち新発田市では中期以後の遺跡が多く存在しています。中期は縄文時代の中で最も暖かい時期で、縄文海進が進んだと言われています。

新発田市では、現在700ヶ所ほどの遺跡が見つかっており、このうち177ヶ所が縄文時代です。当時の主な食料である木の実や動物が豊富な山手の川東、菅谷、米倉、赤谷の各地区などに多い傾向が見られます。

このうち二つの遺跡を取り上げて具体的にお話します。まずは縄文時代中期の石田遺跡です。二王子岳^{ふもと}の麓、菅谷地区の上石川にあり、昭和 54 年に水田の基盤整備の関連で発掘調査を行いました。

発見された遺構には、川原石^{かわらいし}を円形に並べた囲炉裏^{いろり}のような炉があります(図4)。写真では分かりづらいですが、繰り返し火が焚かれて石は変色し、床の土も陶器のように締まっています。次の写真は土偶^{どぐう}が出てきた様子(図5)と縄文土器が出てきた時の様子です(図6)。土器が土の中で倒れて横に潰れた状態ですが、これは土器の一般的な出方ですが、接合し組み立てた姿が次の写真です(図7)。

これは「王冠形土器」と呼ばれる、新潟県の縄文時代中期に非常に特徴的な土器です。十日町市や長岡市など信濃川の近くには「火焰土器」と呼ばれる非常に派手な土器の一群がありますが、この王冠形土器もその仲間であり、新発田の縄文土器も新潟県全体の特徴に含まれるということが言えると思います。一方、次の画像はシンプルな作りの土器で、東北地方の南部、山形県や福島県域に多くあるタイプです(図8)。新発田はこれらの隣接地域とも繋がりが深かったことがわかる資料です。

続いて川東地区の板山にある縄文時代後期中野遺跡をご紹介します。加治川支流の板山川に面した平らな場所に営まれた遺跡です。次の写真は、バケツのような形の土器が3つ並んで埋まった状態で発見された様子です(図9)。先ほど、土器は潰れて出ることが多いと言いましたが、このように埋まった状態のまま出土することもあります。これは、当時の人間が意図的に埋めた土器が出土した事例で、「埋設土器」と言います。埋めた理由はさまざまですが、一番多い理由は墓^{はか}として埋めた場合だと考えられます。

このほか、中野遺跡で見つかった土器に「注口土器」と呼ばれる注ぎ口の付いた土器があります(図10)。縄文時代でも初めのうちはバケツのような土器ばかりでしたが、縄文時代後期になると、注口土器などが作られバラエティーが出てきます。なお、この注口土器は、ともに出土した土偶と合わせて市の指定文化財になっています。

次は石のアクセサリです(図11)。写真に見える石のかけらは、穴を開けたネックレスや勾玉^{まがたま}などです。石材にはヒスイも使われています。ヒスイは糸魚川市の近隣で採れますが、

それ以外では実用的な質と量に乏しく、日本の遺跡で見つかるヒスイは糸魚川産でほぼ間違いありません。ヒスイのアクセサリーの製作も原産地の糸魚川周辺で行われていました。ところが、糸魚川から 200km 以上も離れた新発田の中野遺跡からは、完成品だけでなくアクセサリーの作りかけも見つかっています。これは珍しいことで、この遺跡が重要な中継拠点だったという可能性があるとと言えます。

一方、縄文時代の新発田周辺に特産物といえるものがあつたかということ、一つは「黒曜石」、もう一つは「磨製石斧^{ませいせきふ}」という石を材料にした斧がありました。縄文時代までは加治川周辺で作られた斧^{おの}が各地に出回っています。ヒスイの加工品が中野遺跡で出土する背景には、こうした特産物の存在も関係があるのかもしれませんが。

次いで弥生遺跡です。こちらは 21 遺跡が見つかり、全体の 3%と数は少ないのですが、今日ご紹介する村尻遺跡^{やまそうか}と山草荷遺跡という非常に注目される遺跡が見つかっています。

まず、菅谷地区の下寺内^{しもじない}にある村尻遺跡です。櫛形山脈^{くしがた}の南東側の麓、坂井川に面するちょっと小高い場所に遺跡があります。写真は土器が出土した様子で、壺^{つぼ}が6つほど埋まっている状態が見えます(図12)。詳しく調べたところ当時のお墓であると判明しました。焼けた人骨と副葬品が少量見つかっています。こういった壺が並ぶタイプのお墓は、弥生時代前半の東日本で特徴的に見つかっています。次の写真は村尻遺跡の墓から出土した代表的な土器の集合写真ですが、非常に状態が良いということで国の重要文化財に指定されています(図13)。新発田市で国の重要文化財になっているのは、他には新発田城表門と旧二の丸^{すみやぐら}の隅櫓^{すみやぐら}だけです。

この中で、特に珍しいのが「土偶形容器^{どぐうがたようき}」と呼ばれる、ヒトの姿を模した土器です(図14)。写真は土器の表と裏の様子です。高さは 45.3cm と小さな子どもの上半身くらいで、お墓の穴から出土しました。弥生時代の同じタイプの墓は何ヶ所も調査されていますが、村尻遺跡のようなヒトの形をした容器は他にはなく、唯一無二の非常に貴重な資料です。

もう一つ、加治川下流沿いの草荷地内で見つかった山草荷 I 遺跡をご紹介します。現在の海岸線からはかなり離れていますが、縄文時代に形成された砂丘^{さきゅう}の内陸側に立地します。この遺跡は、地元で小学校の校長先生を務めていた大木さんという方が昭和 11 年に発見したもので、

当時はまだ弥生土器の研究が途に就いたばかりで、特に東北・北陸地方の弥生土器のことはあまり分かっていませんでした。この土器が東北・北陸地方の弥生土器を知るきっかけとなったことから、全国から弥生時代の研究者が訪れて調査しています。また、出土した土器の一部は県指定文化財になっています(図15)。

土器の写真を拡大すると渦巻き模様がぐるぐると描かれていたり、三角形を相似形に重ねた模様が見られます(図16)。こういった模様の弥生土器は東北地方南部で多く見つかり、やはり東北地方南部との繋がりが強かったのかなということが分かります。

一方で、富山や石川県域などの北陸地方、長野県域など中部高地地区、秋田県域など東北地方北部のそれぞれの土器と共通した特徴を持つ土器も出土しており、文化が交わるような場所であったのではないとも言われています。

以上、雑ぱくですが縄文時代と弥生時代の遺跡を2つずつ紹介しました。

最後に、縄文時代で少し触れた黒曜石のお話を加えます。縄文時代は石を材料に道具を作っているため、石材が生活の質を左右しました。刃物なら切れ味の良さ、同時に加工のしやすさも大事です。その特徴を持つ石材が天然のガラス成分からなる黒曜石で、大変珍重されました。黒曜石はどこにでもあるわけではなく、全国で100ヶ所から200ヶ所で産出します。新発田では川東地区の板山と、菅谷地区の上石川および川東地区の上三光で採れ、写真は板山の黒曜石で作られたやじりです(図17)。黒曜石の内部はガラスのような光沢があり、きれいに割れます。県内では佐渡市や新津丘陵の一部で産出されますが、量は新発田産よりもさらに少なく、あまり使われていないようです。

板山産の黒曜石製の石器は、新潟県内だけでなく福島・宮城・栃木各県などの遺跡からも出土しています。新発田に入ってくるものもあれば、新発田から出て行くものもありました。4,000～5,000年前にこれだけの人の動きがあったということです。

こういう遺跡調査で判ったことを伝える手法の一つとして、小学6年生に授業を行っています。6年生になると歴史の授業が始まりますので、教室に出土品を持ち込み、学ぶ動機づけとして教科書だけでなく地域の歴史を知ってもらっています。土器は触れることで気づくことも多く、例えば

縄文土器と弥生土器では重さが違います。それだけ粘土を薄くできる技術の進歩が体感できます。この授業を25年ほど続けており、これまで1万8,000人ほどの子どもたちに話を聞いてもらいました。

まとめになります。かつては野蛮人といったイメージを持たれがちだった縄文人ですが、環境に応じて独自の文化を発展させた人々で、自然を相手にしつつ、良い暮らしを手に入れるために様々な工夫を重ねてきた人々と言えます。現代の私たちは、新発田のパイオニアと呼ぶべき人たちから、生きるための知恵や心、技を学んでいくべきだと考えております。



図1



図2



図4



図5



図6

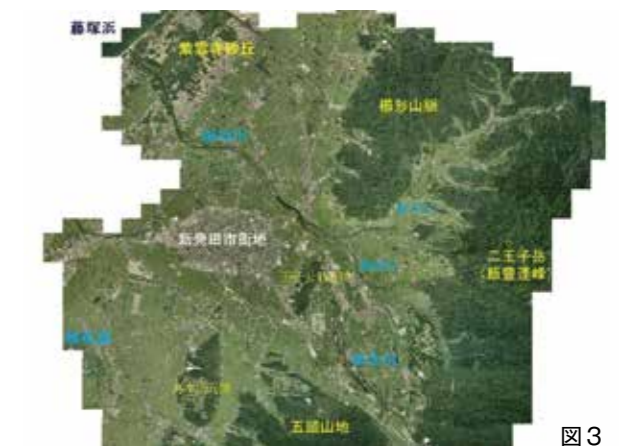


図3



図7



図8



図9



図10



図11



図12



図13



図14



図15



図17



図16

Lecture 3 佐々木加地一族の祖、佐々木盛綱の足跡を探る

新発田盛綱会 副会長 長浜 光雄

私は歴史研究者ではなく趣味で歴史を学んでいます。今日は、私がいろいろなところから集めた情報をもとにお話をします。

新発田の歴史というと、皆さんは溝口秀勝侯が大聖寺から移ってきたあたりからはご存じかと思いますが、今日は平安時代末期から鎌倉時代、そして戦国時代、江戸時代の前までのお話をいたします。

佐々木加地一族の祖、佐々木盛綱が源頼朝から加地荘を受領したのはいまから840年前、元暦2（1185）年です。佐々木加地一族は鎌倉時代から安土桃山時代の末期まで、新発田をおよそ415年間統治したのです。新発田藩初代藩主溝口秀勝侯が、豊臣秀吉に命じられて新発田へ転封したのがいまから427年前で、明治4（1871）年までおよそ273年間統治しました。佐々木加地一族の方が、はるかに永い年月を統治しています。

佐々木源氏の系図をご覧ください（図1）。もとは宇多天皇から始まり、佐々木盛綱の父は佐々木秀義で、佐々木加地一族の祖、盛綱は三男です。四男高綱は乃木希典の先祖です。藤戸神社（図2）第一鳥居の右側に乃木希典の顕彰碑があります。

盛綱の長男が信実で二代目です。信実の長男は秀忠と言いまして、群馬県安中市の磯部郷を継ぎました。次男実秀が佐々木加地一族の三代目になります。川東の大友に館があったといわれています。四代目が実綱、信実の三男が時秀で、そのずっとあとに新発田氏と五十公野氏に繋がります。五男が義綱で、竹俣氏と楠川氏に繋がります。

これが佐々木加地一族22代までの名前を網羅した資料になります。皆さんにお配りしましたので、あとでゆっくりご覧ください。

佐々木源氏の発祥の地なんですけども、これ沙沙貴神社（図3）＝ささき神社と読みます。場所は琵琶湖の東、付近一帯が近江国佐々木荘だった。近くには安土城があります。

平治元(1159)年に京都で平治の乱が起こり、平清盛と源義朝が戦いました。平清盛が勝利して、義朝の三男頼朝を伊豆国の蛭ヶ小島に流しました。伊豆半島の付け根のところでは、

その後、佐々木秀義父子が、盛綱が9歳のときですが、母方の伯母の夫、藤原秀衡を頼って奥州へ向かう途中、相模国渋谷荘の渋谷重国の庇護を受けました。いまで言うとも海老名市とか綾瀬市とかのあたりですね。

源頼朝は流されて20年ほど後に、平家打倒にむけて挙兵しました。治承4(1180)年です。伊豆目代、つまり代官である山木兼隆の誅伐に、佐々木四兄弟もはせ参じて戦いました。この20年の間に渋谷荘から蛭ヶ小島へ、佐々木四兄弟が頼朝の側用人となってお世話していた関係です。

この戦いに勝ったあと石橋山合戦で敗れ、千葉県先端の安房国に逃れ、そこから鎌倉に入る間に関東の豪族が頼朝に協力したのです。歌川国芳という江戸時代の浮世絵師が鎌倉の頼朝を描いています(図4)が、これは相当盛っていてこんなに立派な館じゃなかったと思います。頼朝と、弟の範頼、義経がいて、佐々木盛綱と弟の高綱、北条義時も描かれています。これから平家打倒のため京都、屋島や壇ノ浦に向かう前の場面です。

元暦元(1184)年、岡山県倉敷市の藤戸町で源平藤戸合戦があり、ここに佐々木盛綱の像(図5)が建っています。いまは陸地ですが、当時は瀬戸内海の海峡、藤戸海峡がありまして、盛綱が乗り出し岩から平家の陣地に馬で海を渡って、平家を屋島(四国)へ敗走させました。乗っていた馬はたぶん頼朝から贈られた馬です。

支配体制ですが、鎌倉時代は各地に荘園がありました。盛綱は加地荘という荘園をもらいました。奥山荘というのは、いまの関川村、胎内市のあたりで、平家の城一族が支配していました。尊卑分脈という代々の家系を記した文書に、城氏の系図があります。これを見ると加地城は城氏の城長成(加地三郎)が築いたのではないかと思います。

盛綱と頼朝の関係ですが、盛綱は頼朝の側近として活躍し、加地荘産の鮭を2度贈っていることが歴史書の吾妻鏡に出ています。鶴岡八幡宮の東に頼朝が住んだとされ、佐々木盛綱もこのあたりに住んだはずで、盛綱が建立したとされる小動神社が江ノ島の近くにありま

盛綱と護念上人ですが、護念上人は願文山明王院護国寺を最初に造った方で、頼朝の叔父です。この方が不動明王の尊像を安置していた比叡山の無動寺から、頭を持ってきてここに安置いたしました。盛綱がこの護念上人を頼朝に引き合わせました。そして娘さんの病気を治したりしています。護念上人の墓は菅谷寺(図6)近くの小高いところにあります。いまは雨ざらしで、このままにしておくとも墓石が削られてしまいますので、地区の皆さんで対応を考えてください。それから藤戸神社は東宮内の加地城登山口のところにあります。宇多天皇、天照大神などと「浦の男」(藤戸合戦で盛綱が海峡を渡るときに浅瀬を教えてくれた人)を祀っています。加地城二の丸跡の元社にあった藤戸神社は、佐々木加地一族が減ったときに焼けて、江戸時代にこの場所で再建されました。もう一箇所、新潟市東区松崎に藤戸神社(図7)があります。この説明看板によると、城資盛を討った盛綱が凱旋の帰路、ここを通り後に造営したとされています。

加地城(図8)ですが、東宮内に本丸跡があり、二の丸跡に先ほど言った元社があり、高台に藤戸神社があった。藤戸神社第一鳥居の右脇に、盛綱の弟高綱の子孫である乃木希典の顕彰碑が建っております。藤戸神社第一鳥居手前の今泉川にかかる橋から右へ150mほどに墓地がありますが、ここに館があったのではないかとされています。墓の裏は広い平坦地になっておりまして、行政で発掘していただきたいものです。おそらく痕跡が残っていると思います。ここには今泉川が流れていますが、当時は川幅が70mほどもあって堀の役目もしていたそうです。

加地城は、近辺の家臣の館が敵に攻め落とされそうになった時、避難してくるところで、本丸跡から眺めると付近に点在の館跡が俯瞰できます。

源頼朝は相模川の橋の落成供養に臨席した帰りに落馬し、それがもとで亡くなりました。建久10(1199)年のことです。二代目が源頼家です。盛綱は西念と名を変えて磯部郷、今の群馬県安中市へ移りました。

城資盛が鳥坂城、現在の胎内市で反乱を起こしました。西念は3日間で磯部から鳥坂城に着いて城資盛を破った。城資盛の伯母が、かの有名な板額御前です。中条駅前に板額御前の像があって、鳥坂城の方を眺めて建っています。岡田の法音寺大日堂には、西念が頼朝供養のために建てたと伝わる五輪塔があります。また「為佐々木三郎左衛門盛綱入道」と刻してある風鐸もあ

ります。本堂屋根の四隅に下げて、風が吹くと鳴ったそうです。昨年お寺にお伺いして見せてもらいました。ご住職によると、一時期所有が大木金平さんに移ったそうです。恐らく困って売ったのですが、ご住職が大木さん親族のところへお伺いして返却してもらったそうです。高さ30センチくらいで、それ程大きくはありません。

盛綱夫妻の墓（供養塔）は群馬県安中市の松岸寺にあります。いまは立派な祠の中にありますが、当初は雨ざらしだったそうです。盛綱夫妻は信実の長男の秀忠と暮らしていました。

佐々木加地氏の山城ですが、麓城、滝城、菅谷城、箱岩城、鳥屋ノ峰城などがあります。加地城と麓城の谷間（御墓沢）に佐々木春綱等の墓があり、「七葉春綱の会」で毎年秋に供養しております。加地城裏に御前清水という湧水が出ているところもあります。二代佐々木信実のときに承久の乱というのが、承久3(1221)年にありました。後鳥羽上皇が北条義時追討の宣旨を出し、信実が願文山で酒匂家賢を誅伐しました。これが関東の武士が挙兵した最初です。願文山は、もとは宝塔山と言っていたのが、どこでどう変わったのか分からないけど、今は願文山です。行政で発掘していただいて明らかにしていただきたいものです。

吾妻鏡は鎌倉幕府が編纂した歴史書で、全部で52巻（ただし第45巻欠）あります。治承4(1180)年4月から文永3(1266)年までおよそ86年、途中欠落していますが、このうち佐々木盛綱一族が86箇所も出てきます。大変貢献したんですね。徳川家康も好んで読んで戦略を立てていたといわれています。

18代佐々木春綱ですが、神応山香傳寺を蔵光小路に再興して曹洞宗に改宗しました。春綱の妻は上杉謙信の姉です。この夫婦には当初子どもがなかったので上杉謙信を養子にもらおうとしたのですが、謙信に断られた。もしも養子にしていたら歴史が変わっていました。

香傳寺は土塁で囲まれており、中世の館跡です。麓集落から出土したと伝わる壺が2つあります。どちらも寄附されたものです。一つは珠洲焼、いま七葉中学校に所蔵されており、もう一つは常滑焼で、香傳寺で所蔵しています。歴史図書館の鶴巻康志さんが鑑定した結果、間違いなく、いずれも平安時代末期～鎌倉時代初期の遺物だということです。

それから香傳寺は鞍と鐙も所蔵しており、鐙は2つあるのですが一対ではない。鞍が入って

いた箱書によると天保元(1830)年8月25日に香傳寺へ寄贈されました。加地城主使用の鞍と鐙ですと、書いてあります。

新発田地域の中世城郭の分布ですが、先ほど佐々木加地一族の分布図を見ましたが、佐々木盛綱、信実がどこに住んでいたかは分かっていません。一説には七葉中学校のあたりではないかといわれていますが、はっきりしません。

佐々木加地一族のその後は、加地城主佐々木資綱の出府中、五十公野道如齋に攻められて落城、新発田重家の支城になりました。これが天正9(1581)年。上杉景勝による新発田合戦で加地、赤谷、五十公野、新発田城が落城し、新発田重家は討死しました。本能寺の変がなければ新発田重家の討死はなく、違う歴史が生まれたのかなと思います。その後加地城は佐々木資綱に返されましたが、上杉棄民一揆に参加して敗れ、ここで佐々木加地一族は滅びました。

しかし一族の中で竹俣氏は、今日まで継続しています。12代の竹俣利綱は、慶長3(1598)年の上杉景勝の会津移封に従って、その後米沢に移ります。皆さんご存じの米沢藩九代藩主上杉鷹山を、18代の竹俣當綱が藩政革命を主導し財政立て直しに貢献したといわれています。

川東の三光地区に竹俣一族の館跡や城跡がかなり残っています。本丸、二の丸跡に石碑が建っていますのでぜひ行ってみてください。新発田市はこのあたりを広報していないのであまりご存じではないかもしれませんが、このあたりは竹俣一族が治めた地です。

最初に申しましたが佐々木加地一族の祖は佐々木盛綱です。加地荘を受領したのは今から840年前で、およそ415年間統治しました。新発田藩主はおよそ273年間。最後になりますが、「歴史を掘り起こし、脈々と絆を育む」が新発田盛綱会のモットーです。

●引用文献
「越後加地氏新発田氏の系譜」
飯田素州著

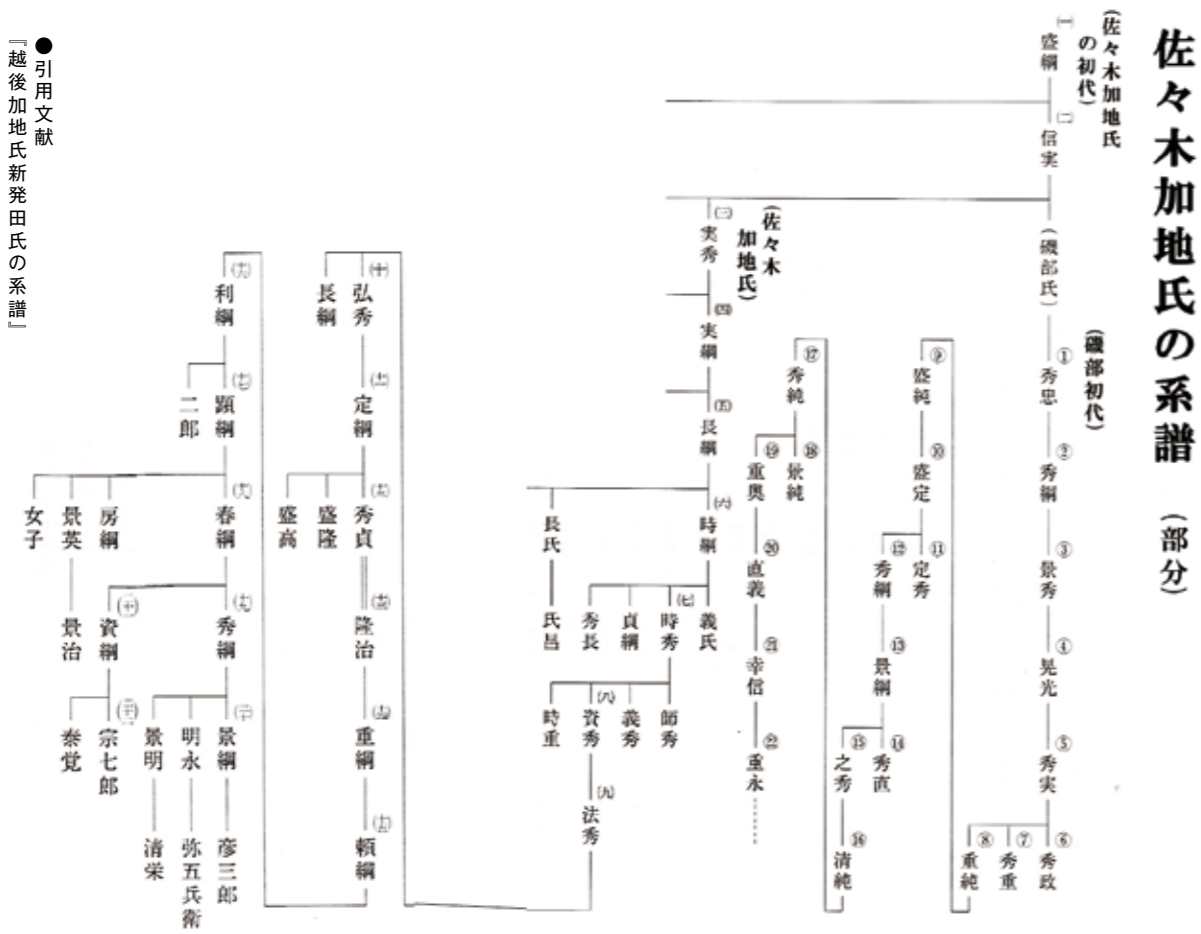


図1 加地氏の系譜



図2 藤戸神社



図3 沙沙貴神社楼門



図4 平家追悼へ出陣を賀し給う図



図5 倉敷市の盛綱の像



図6 菅谷寺



図7 松崎の藤戸神社



図9 源頼朝公供養塔

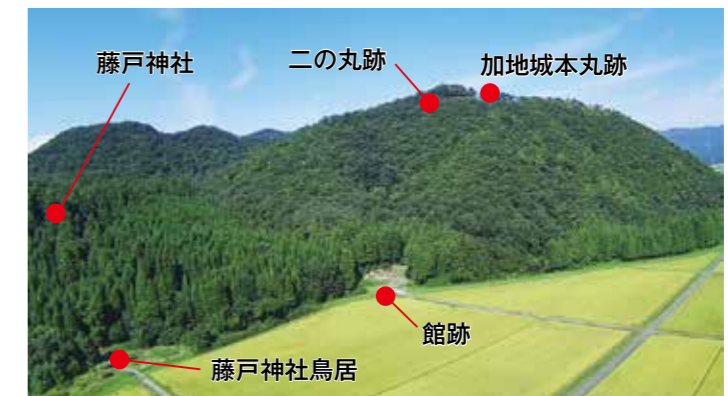


図8 加地城

4 溝口家と城

前新発田市立歴史図書館 館長 鈴木 秋彦

私は新発田市職員として新発田城の復元の際に担当係長を務めておりまして、市民の皆さんに大変お世話になりました。今日こうしてお話をいただきましたのでやって参りました。

ご存じとは思いますがおさらいということで溝口の殿様の話から始めます。溝口家为新発田へ来て既に400年が過ぎているわけですが、いま暮らしている町は溝口秀勝(図1)によって開かれたと言ってよいと思います。秀勝が築いたプランがまだ現在に残っており、その中に私たちが暮らしているんだということを考えていきたいと思います。

溝口家の出身は今の愛知県稲沢市西溝口村(旧中島郡)というところで、名古屋から東海道新幹線で米原方面に行きますと、名古屋駅からは5分ほどのところ、進行方向向かって左手の平野の中にその姿を見ることができます。出張などで行かれた折には景色を眺めていただければと思います。

このあたりにもう一つ東溝口村(旧海東郡)というのがありまして、今はあま市になっておりますが、こちらが溝口侯の出身地であると、資料館でもそのように展示しておりますが、溝口侯が江戸時代幕府からの問い合わせで答えているのは今の稲沢市です。

原っぱ一つ越えたところには蜂須賀、福島という集落があります。蜂須賀は、蜂須賀小六が出たところ、福島は福島正則です。戦国大名ではなく、その後には大名になる人たちが出たところ。

源平藤橘と言いますが、溝口侯は清和源氏の出としていて、江戸時代の公式の場では「みぞぐち」と濁らないそうです。現在のご当主が豊田神社の祭礼に来られたときに確認したところ、現在は濁って「みぞぐち」を使っているそうです。家紋は新発田市の市章にもなっている五階菱(図2)。職人町の獅子舞などに使われる井桁の菱もこの変形です。託明寺様の御紋が「なずな」で、これが変形して五階菱になったと言われます。江戸時代に入って菩提寺が宝光寺様に移っていきます。新発田の何かのPRで見たのですが、溝口家の紋が「水菜」と書いてあったのを見ましたが、正しくは春の七草のうちのひとつである「なずな」です。

関ヶ原の後徳川に仕えた大名を「外様大名」と呼びまして、領地を没収されたりする例が多いなか、溝口家が明治維新まで12代続いたのは大変珍しい例です。新発田藩溝口家の最大の功績は何かというと、与えられた蒲原郡で治水を行ったこと。この土地は信濃川、阿賀野川、加治川が流れ、福島潟、紫雲寺潟という大きな湖沼があった。まず川の流れをコントロールし、堤防を築いた。その上で新田開発を行って米の増産を行いました。新発田藩が、米の増産によって最も豊かだったのは元禄時代、初代秀勝侯が新発田に入って100年ほど経ったときです。この時期に今の清水園や五十公野御茶屋などの文化施設が造られていきました。

溝口秀勝は天文17(1548)年、戦国時代の尾張に生まれ、江戸時代が始まった頃に当たる1610年に63歳で亡くなりました。人の生涯を決めるのは、良い上司に仕え、縁を掴んでいくところにコツがあったと思います。最初は織田信長の部下、丹羽長秀です。それから織田信長に取り立てられ、豊臣秀吉、徳川家康と四君に仕えます。聴いたことがあると思いますが、

織田がつき、羽柴が捏ねし天下餅

座りしままに食うは徳川

天下の覇権が織田から始まり豊臣、そして徳川に収まっていくということをうたったものです。

丹羽長秀は、現在の福島県二本松市にご子孫がいらっしゃいます。溝口秀勝は、丹羽長秀のもとで成長していきました。溝口家が偉いと思うのは、和歌山県の高野山に三宝院というお寺があるのですが、これは丹羽家と溝口家がお金を出して支えてきた寺でして、江戸時代に入っても溝口家は丹羽家との縁を大事にして三宝院を支え続けた。溝口家の律儀なところが取れると思います。

溝口秀勝は34歳のとき若狭国高浜(福井県大飯郡高浜町)五千石の城主となります。五千石はまだ大名ではありません。次いで加賀大聖寺四万四千石の城主となり、これで大名になった。大聖寺は石川県加賀市、加賀温泉郷のあるところで、溝口家の縁で新発田市と友好都市となっていますね。

今日、一つだけ年号を覚えて帰っていただきたいのが慶長3(1598)年です。この年に溝口侯が越後にやって来ました。越後国では上杉景勝を会津へ移して、秀吉の息の掛かった堀秀治

を入れます。越後の近世は慶長3（1598）年から始まる。一つの時代の区切りの年です。

溝口秀勝は蒲原郡を領地として与えられますが、最初に入ったのは五十公野でございます。いま五十公野の御茶屋の上に豊田神社がありますが、その山頂の腰掛山というところに座って築城のプランを練ったと言われています。

歴史の話のみとすべきところですが、一つエピソードを紹介します。

秀勝侯は、もちろん武勇にも秀でていましたが、その時代戦い一点張りの武将が多い中、秀勝侯は水利や経済のことを考えていたとされます。例えば安土城（滋賀県近江八幡市）の築城は丹羽長秀の下で運搬係、つまり輜重（しちょう）のような役割をこなしていた。他の大名は敵を槍で突くことは得意だったが、割り算ができなくて褒美を分けることができなかったそうです。ところが秀勝侯は懐にそろばんを持って行って、パチパチとやってのけた。

それから「五国丸」という薬を調合していました。秀吉が天正18（1591）年、朝鮮出兵の拠点として築いた肥前名護屋城（佐賀県唐津市）へ行くのに気分が優れないとき、この薬を差し上げて秀吉が行くことができた。五国丸というのは5つの国を征服するという意味と、熊の胆とか5つの薬を混ぜたものという2つの説があるそうです。

これが新発田家中に伝わっている話ですが、歴史図書館にある新発田藩の政務日誌である『月番日記』という公式記録が残っています。その中に五国丸の記述が確かにありました。

話は変わりますが、明智光秀が越前朝倉氏を訪ねたときに朝倉家秘伝の漢方薬の調合を習得し、その後の明智光秀のステータスになったそうです。秀勝侯もまた同様だったようです。それから名護屋城にあった風流をたしなむ山里丸を解体して伏見へ移動させる命を受けた。これは『御記録』という新発田藩の公式記録に記述があります。20年ほど前に名護屋城で発掘調査が行われた際、山里丸があった場所がきれいに整地されて砂が敷き詰められていたことがわかった。普通なら移築した後は野となれ山となれですが、秀勝侯は人が見ないところで秀吉に対する畏敬の念を持っていたことがわかります。

加賀から新発田へ来るときに助けられた五十嵐家という方が寺泊にいたのですが、その恩義を感じて毎年200俵の米を明治まで送り続けて感謝を示した。

溝口侯が来るまで新発田は、新発田重家という佐々木加治氏の子孫の支配下でした。彼らに仕えていた武将を、秀勝侯は自分の体制の中に取りこみます。例えば検断といって町の中で不法行為などの調整をするトップの石川家（新発田重家の子孫）、米倉の斎藤家（佐々木氏の重臣）も大庄屋といたします。佐々木氏の有力者を取りこんでいったのが領内経営のポイントだったと思います。

たとえば、土佐藩山内家は、奥さん同士が姉妹だったといわれていますが、旧長宗我部を徹底的に殲滅しているんですね。この点秀勝侯は立派だったと思います。

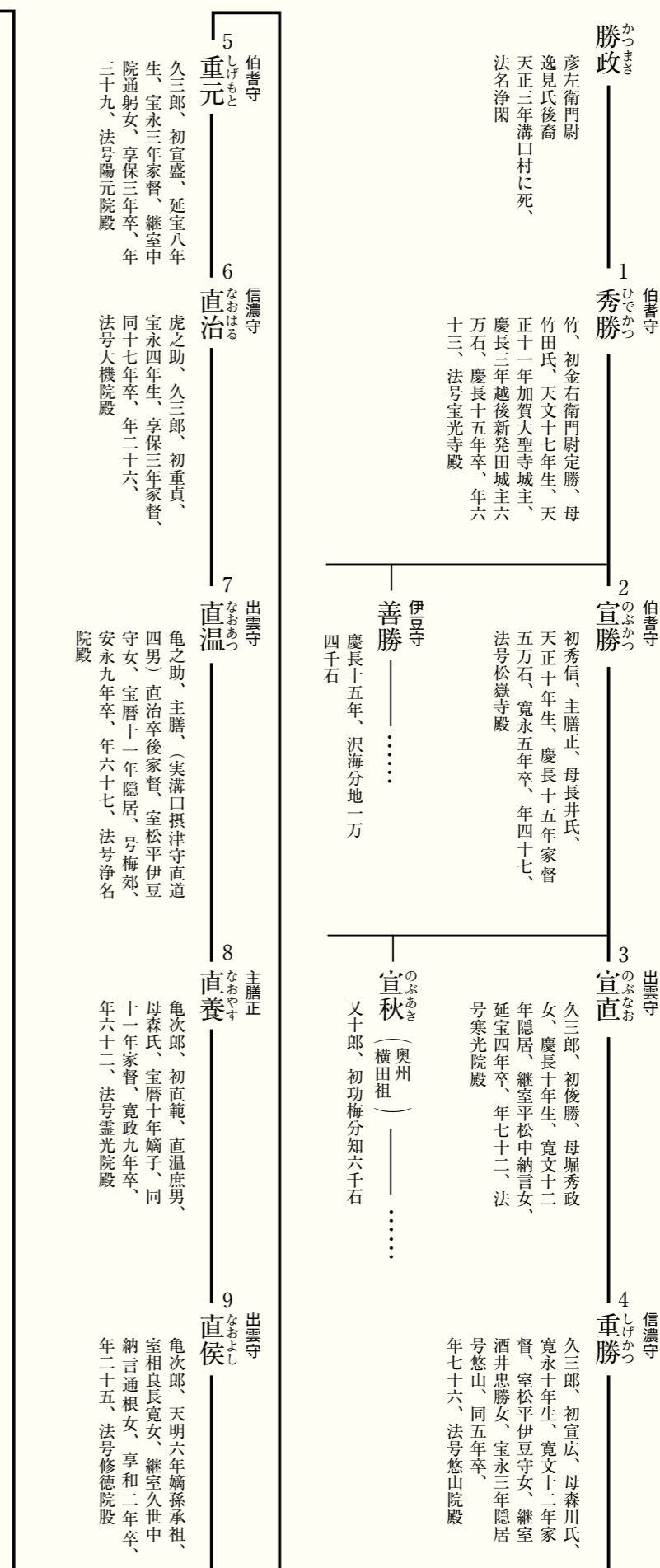
時間が押してきまして少し飛ばします。最初五十公野に入ったと言いましたが、ここは交通の要所で、後に市が立つようになりました。その熊ノ沢に仮住まいをして、56年がかりで新発田城を築城しています。秀勝侯は慶長15(1610)年に新発田城で亡くなり、五十公野で火葬されています。その場所には石仏が建てられています。いま雨ざらしになっていてちょっと残念です。

秀勝侯の寺は大鱗寺という寺だったのですが、埋葬時に浄見寺という名に変えまして、それが徳川綱吉の院号常憲院に音が同一で恐れ多いということで宝光寺に変えてこれが菩提寺になる。溝口家の本家、父親や兄弟は託明寺が菩提寺なのですが、おそらく一向一揆のために真宗から禅宗に変えたのではないかといわれています。

蒲原へ来るときは石田三成に六万石だと言われたのに実際は二万石くらいだったので恨んだという話も家中では伝えられています。

56年掛かってようやくお城が完成しますが、城で重要なのは普請、土木工事です。そこに上物を造るのが作事（建築工事）で、これをやったのは二代宣勝。完成させたのは三代宣直です。どうしてこれだけ時間が掛かったかということに、新潟出身で新潮社から文庫を出している小松重男という作家が、城を築いてもどこかへ移される可能性があるから時間をかけたという説を述べていますが、これも一つの考え方と思います。

新発田城の特色は木戸です。町のあちこちに造られており、他の城下町にはない。町の入り口には大木戸が、現在の大栄町にありました。それからもう一箇所、お神明様のところに大きな木戸がありました。そこにはいま下町交番がありまして木戸番がいたところの跡に交番が建ったのではないかと、新発田警察署を訪ねて訊いてみたら「分からない」と言われました。今は



『新発田市史』(上巻)より抜粋。
善勝、宣秋のみ名を記したが、あとは新発田市史参照のこと

移転してポケットパークになっていますが、菊谷さん(御菓子司菊谷)の向かいに諏訪前交番というのがあったのを覚えておられますか? そこもやはり木戸番のあった場所ではないかな、と。つまり私たちは、秀勝侯が築いた遺産の中で暮らしているのだな、と思います。

新発田城の石垣というのは、石垣の歴史の中でも本当に精緻な造りをしています。切り込み接布積みという造りですが、石を方形に加工して積んでいます。材料は五十公野の古寺山の粗粒玄武岩で、江戸から来た職人たちによって加工されました。

まとめになります、私たちの暮らす新発田には、まだまだ謎があり、それを解いていくヒントがたくさんある。新発田城にある門の名前をご存じですか? 小学生の見学の案内をすると、9割は「大手門」と答えますが、あれは表門です。では大手門はどこにあるかという、新発田警察署のあたりです。で、新発田警察署があるのは中央町、表門のあるところは大手町。表門のある場所が表町、大手門のあるところが大手町となるのが然るべきと思いますが、謎です。探っていくと新発田の町には謎を解くヒント、そこから得られる教訓があると思います。

最後に、秀勝侯は高浜五千石の城主にしてもらって、10日ほど後に織田信長のところへお礼に赴き、そのとき朝鮮半島で獲った鷹を6羽持参しています。信長はたいそう喜んだと『信長公記』に記されています。おそらく、城主にってもらう前から情報収集をして、滅多に手に入らないようなプレゼントをできるような流通ルートを掌握していた点が秀勝侯の成功の秘密ではないかなと思います。



図1 初代藩主 溝口秀勝

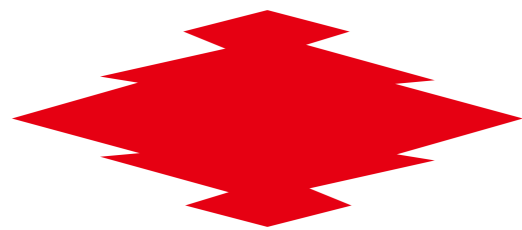
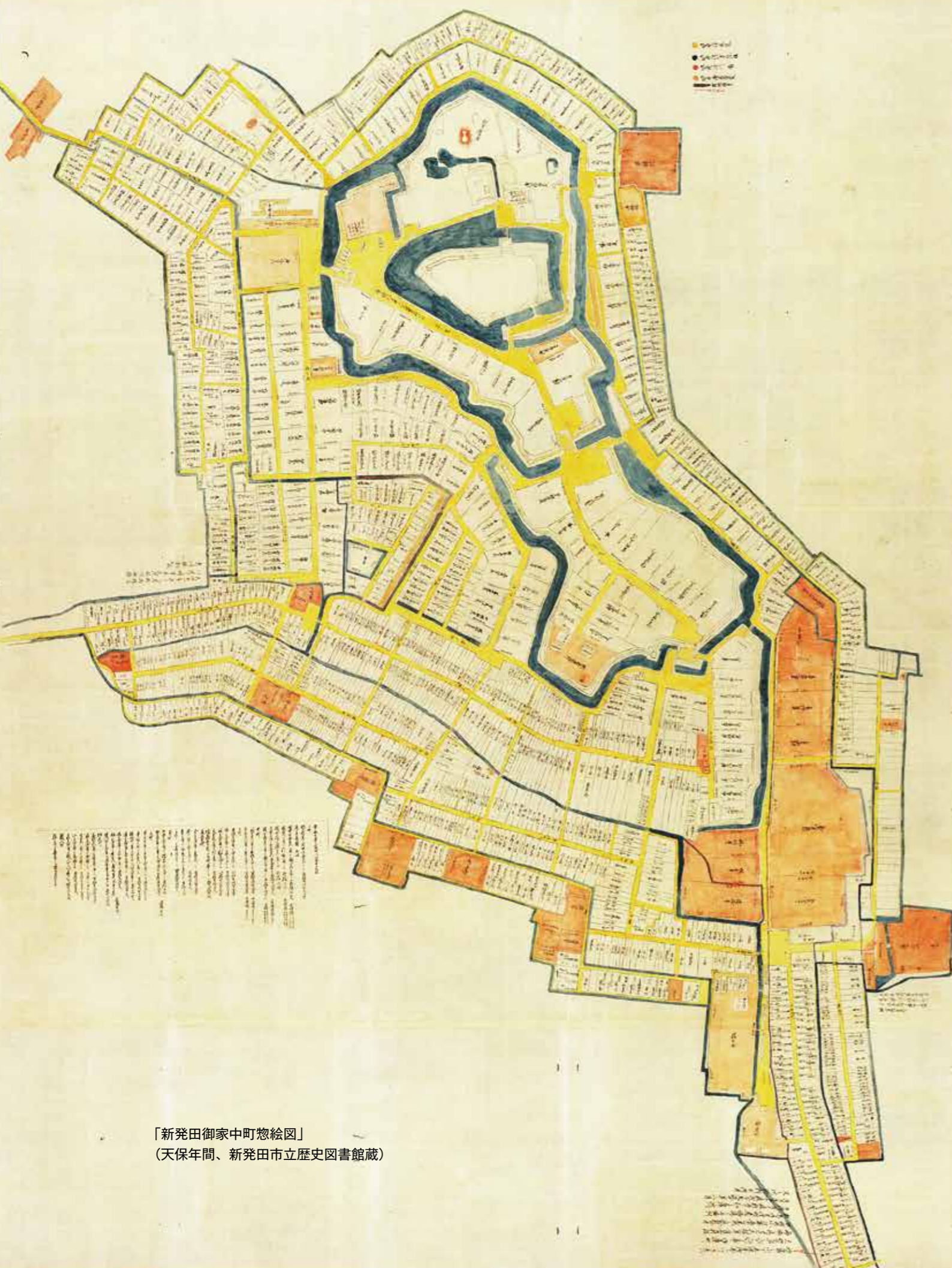


図2 五階菱



「新発田御家中町惣絵図」
(天保年間、新発田市立歴史図書館蔵)

Lecture 5 正保越後国絵図

新発田市立歴史図書館 副参事 鶴巻 康志

新発田市立歴史図書館の鶴巻と申します。今回で2回目となりますがお招きありがとうございます。本日は新発田市が制作した正保越後国絵図しょうほうえちこくにえずの原寸大レプリカ（複製）の話をさせていただきます。別室に置けるかなと思ったのですが、レプリカが大きすぎて入りませんでした。代わりに江戸時代の中頃、終わり頃で2種類の原寸大絵図の原寸大レプリカを別室に広げております。これについてもご説明させていただきます。

まず正保越後国絵図ですが、10m × 5.4m という、非常に大きいサイズです(図1)。この地図は、江戸時代の初期、3代将軍家光いえみつの時に全国の大名に、当時67カ国の国絵図を作って提出しなさいと指示が下りた。越後国は新発田藩だけでなく、長岡藩、高田藩、村上藩など複数の藩が治めておりましたので、それぞれ自分の領地の絵図を作って高田藩に提出し、高田藩が一枚の絵図にまとめて江戸城に提出した。それが「正保越後国絵図」です(図2)。

これは名前に(元禄年間写げんろく)とありますね。実はその後50年を経て5代将軍綱吉つなよしの時代に同様の指示が出されます。この時は越後国だと非常に大きいサイズになってしまうので、真ん中から西側を長岡藩と高田藩が分担し、北半分を新発田藩と村上藩が担当し、二分割した国絵図を作るという方針になりました。この際に新発田藩は、幕府から50年前に提出した絵図を借りて写し、それをもとに元禄の絵図げんろくを作ろうとした。そうすれば作業がはかどりますから。それがこの「正保越後国絵図 元禄年間写げんろく」です。それで写してから原本は江戸城にお返しした。その原本の方は江戸城の火災で焼失しょうしつしてしまうんですね。ですからこれが江戸時代初期の越後の姿を詳細に描いた唯一の絵図ということで、新潟県指定文化財になっています。

新潟県内の博物館などでは必ずこのレプリカが使われていますが、新潟県史に掲載するために撮影した写真(図3)をもとにしているため、拡大すると細部が見えません(図4)。それでこのたび、図書館振興財団さんの助成金を頂戴ちやうだいして高精細画像を撮影し(図5)、それをもとに原寸大絵図をカーテン生地に印刷して公開しています。

正保越後国絵図が何のために作られたか、なぜ10m × 5.4m という巨大な絵図なのかということですが、これは江戸城の大広間に広げ、将軍に「越後はこんな国でございます。ここからここまでが新発田藩、このあたりは高田藩の領地で、石高はこのくらい」と説明するためのものです(図6)。ですから藩ごとの石高の合計、小さい丸印はすべてムラで、中にムラの名前とその村でできる米の石高が記されている。それを全部足していくと新発田藩領分では5万石になる(図7)。そういうことが一目で分かるんですね。検地帳を1枚1枚めくって説明していったら、もう日が暮れてしまって将軍も飽きてしまいます。そういうことを30分で説明できるように、大きな絵図を仕立てたということになります。

ですから皆さん、実際に後の元禄、天保絵図を見て、絵図の上に上がっていただきますともう、自分が将軍になったような気分が味わえます。それくらい、スケールの大きな絵図です。

ただし、大きすぎてなかなか広げられる場所がない。レプリカを作って初めて公開したのが市役所の札の辻広場ですが(図8)、見ている人の大きさからサイズ感が分かるでしょうか。イオン新発田店(図9)、猿橋中学校の体育館(図10)などでも公開しました。学校の授業で活用すると、非常に興味を持ってくれる。自分が知っている地名を見つけることができるというのが非常に大きいようです。地元の方に呼ばれて七葉集会所、敬和学園大学でも公開しました。ご要望があれば持って行って説明します。蔵春閣^{ぞうしゅんかく}2階の大広間でも公開しましたが(図11)、絵図が大きくて端を折り上げないと置けませんでした。魚沼市にも呼ばれました。いま越後と会津を結ぶ八十里越^{はちじゅうりこえ}街道が建設中で盛り上がっていますが、そのイベントです。江戸時代初期の八十里越がどこに描かれているかという話などをさせていただきました。

正保絵図(図12)と元禄13年絵図(図13)、天保^{てんぽう}8年絵図(図14)を見比べると、正保絵図は信濃川と阿賀野川が河口で合流していますが、180年後の天保絵図では阿賀野川に新しい河口^{かいさく}が開削され、紫雲寺潟はこのことと落堀川^{かんたく}によって干拓され、新田村^{しんでんむら}ができている。信濃川下流域の潟もそれぞれ水路の開削によって水田化が進んで耕地が増えていく。そうした様子をつぶさに見ることができます。元禄以降は新発田藩が作った越後の北の方だけ(の絵図)が残っていて、江戸時代前期、中期、後期の変化を比較できます。

正保絵図の詳細を見ますと、佐渡島は描かれておりますけれど、実際の佐渡と比べると小さく描かれています。と言いますのは、佐渡は当時「佐渡国」という別の国でしたから、このへんにありますという程度の情報しか載らないわけです。

河川^{かせん}は、荒川、阿賀野川、信濃川とありますが、越後平野で荒川の下流から角田^{かくたやひこ}弥彦までの間、河口は信濃川^{かこう}河口1箇所でした。このあたりは海岸砂丘列が10mくらいあって、川の水が海に出るのを妨げていた様子が読み取れます(図15・16)。もうちょっと拡大しますと福島潟、塩津潟(紫雲寺潟)の大きさ、深さが書かれており、それぞれに結節する河川、新潟からの船着き場、ここに貨物船が入れますよという情報があり、それから舟入という地名が2箇所あります。これは新発田川の支流で、現在の舟入と小舟渡です。新潟港に入った物資を小船に積み替えて新発田に向かう際にはここまで船が入りました。赤い線は道路でして、4kmおきに一里塚が表示されています。

村々の表示、中曾根村、猿橋村、富塚村などありますが、中曾根村では当時502石のお米が採れました(図17)。村の表示の上に「へ」と入っているのが新発田藩の村という印になります。「へ」の村の石高を合計していくと約5万石になります。本日資料でお配りした中にQRコード(図18)があります。読み込んでいただくと歴史図書館のアーカイブに飛ぶことができます。アーカイブの中に活字化した情報を読み取るページもございますので、実物大レプリカとともにお遣^{つか}いいただくにより詳しい情報を引き出すことができます。

元禄絵図を見ていただきます。正保絵図には東蒲原郡が当時会津領だったため地図にないのですが、元禄絵図は会津領東蒲原郡が描かれています。それから平野部の村々が増えていっている様子が読み取れます。信濃川、阿賀野川の位置は正保と同じですね。

それが天保絵図になりますと、阿賀野川の河口が開削されて現在の位置に変わり、落堀川^{おちぼりがわ}、内野新川^{うちのしんかわ}が増えていきます。いずれも人工的に開削された河口です。こうしたことによって越後平野にあった潟が小さくなります。紫雲寺潟は干拓されてもう描かれていません。3つの絵図を見比べていくと、新しく水路が開削されることによって潟が干拓され、そこに新田村^{しんでんむら}ができていったことがビジュアルでつぶさに確認できる。そういう効果があります。

もう一つとても大事なのが、知っている集落の名前、知っている川の名前とともに、現在通っ

ている道が描き込まれていることです。この道は江戸時代から通っていたんだ、ということが確認できる。地図を見る人が、自分の持っている情報と対比することができる。レプリカは、それぞれ自分のテーマでふるさとの歴史を探索できる機会を提供できる、非常に有効な資料です。しかも持ち運びが可能ですから、学校や地域だけでなく社員研修でもお声がけいただければ持っていくます。自分たちの地元がこういう環境で成り立っているのだということを知っていただく、非常に有効な素材になると思います。

特に新発田の場合で言えば、当初6万石で蒲原郡の領主として、豊臣秀吉の命で加賀大聖寺からやって来て、2代目藩主の時に^{そうみはん}沢海藩1万石を分家し、以来ずっと5万石で推移するのですが、地元民が頑張って新しい水田を開発していく。そのことによって幕末には倍以上の13万石の石高になった。それこそ「オランダの土地は神が作ったのではなく、オランダ人が作った」などという言葉がありますが、同じことが蒲原平野でも言えます。新潟の人たちが頑張った。新発田藩は幕末に10万石へ高直しされますが、これは新しい領地を与えられたのではなく、もともとあった領地で開発を進めたことを示しています。詳細については、ただいま歴史図書館で開催中の企画展をご覧ください（図19）。ぜひお立ち寄りください。

ということで、3つの絵図は「ガマの原」と言われた蒲原平野を日本一の米どころへ^{へんぼう}変貌させていった様子（図20）を^{にょじつ}如実に示しているという話でした。近世、近代における新潟県の治水、利水、耕地開発というようなテーマで日本の遺産に手を上げるとすれば、それを裏付ける資料として自信を持って^{すいしょう}推奨できるものです。皆様には、この絵図を見てまずは新潟平野の歴史に思いをはせていただければと思います。

図1 国絵図の大きさ



図2 正保国絵図全体

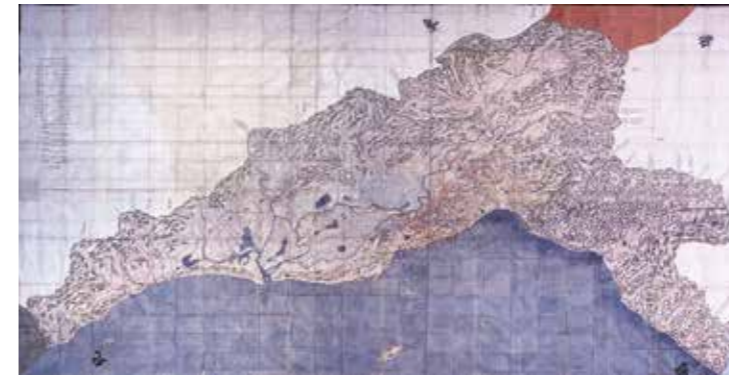


図3 県史で撮影した正保絵図

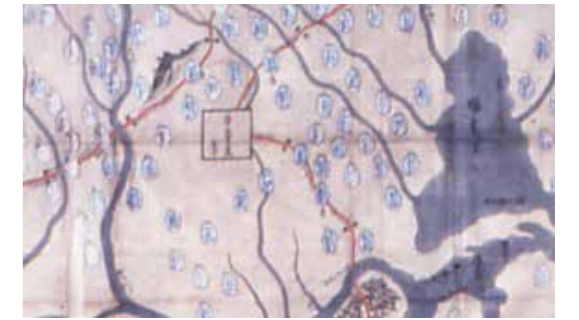


図4 県史正保絵図拡大



図5 絵図撮影風景

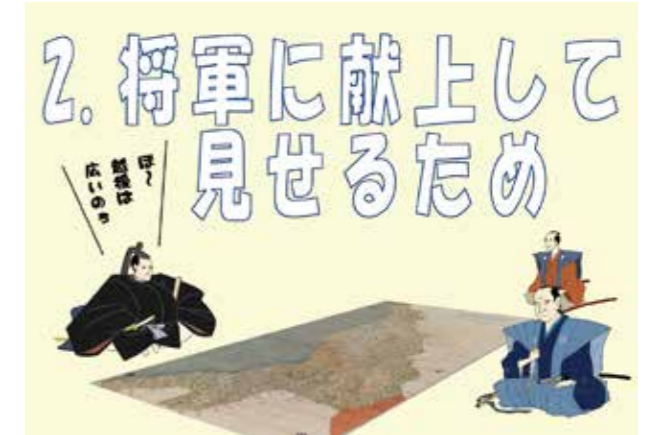


図6 将軍に説明するため

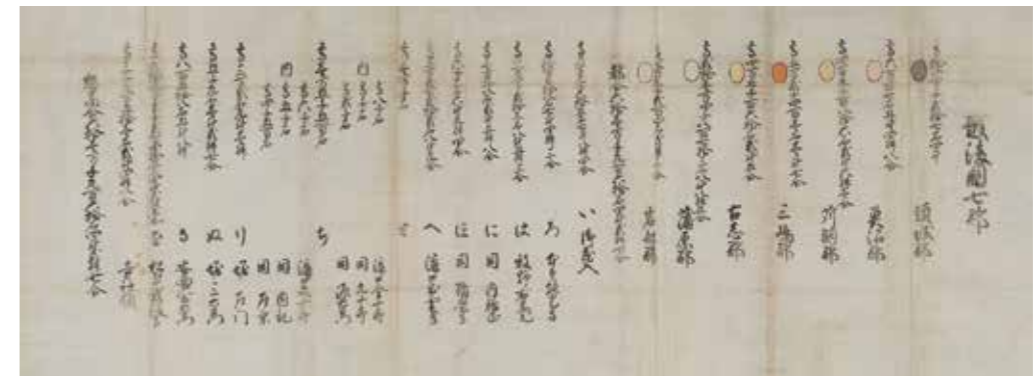


図7 正保国絵図凡例



図8 札ノ辻での公開



図9 イオンでの公開



図10 中学校での公開



図11 蔵春閣での公開



図12 正保絵図北半



図13 元禄絵図



図14 天保絵図村上新発田領



図15 正保越後北半新発田

図16 元禄・天保の干拓後

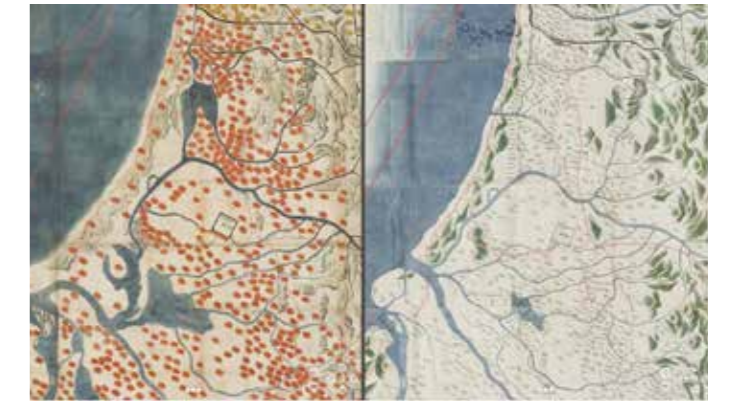


図17 中曽根村



図18 QRコード

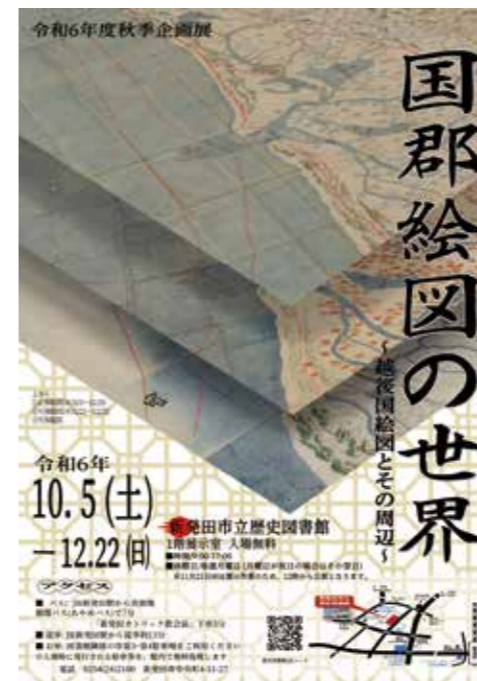


図19 R6 絵図展

図20 蒲原平野の干拓



復元事業の概要

本日は、昨年度に策定した『新発田城^{どぼしもん}土橋門復元整備基本計画』についてご説明いたします。新発田城は市の歴史文化において重要な意味を有し、地域のシンボルとして広く市民に親しまれています。昨年度は約5万9000人の方にご来場いただき、その約9割が市外からのお客様で、観光資源としても大きな役割を果たしています。本計画は「まちづくり総合計画」と「教育大綱」を上位計画として、「県立新発田病院跡地活用整備計画」（平成22年度策定）と「新発田市文化財保存活用地域計画」（令和5年度文化庁認定）の実行プランとして位置付けられています。

文化財保存活用地域計画では、新発田城を多面的に活用し、^{みが}磨き上げを通じてその魅力を向上させ、市民や民間企業等の参画を図るとともに、城自体が運営資金を生み出す仕組み^{こうちく}を構築することで、文化財としての自立性を高め、保存・継承^{けいしやう}へとつなげることを目指しています。現在、文化財を取り巻く環境は年々厳しくなっており、少子高齢化や地域コミュニティ^{きはく}の希薄化などを背景に文化財の保存・継承^{けいしやう}が困難な時代となっています。文化財を維持するためには多くの費用を必要とすることから、担^{にな}い手と維持管理費の確保は切実な課題です。

土橋門はいつ頃建てられ、いつ壊されたのか等の詳細は分かっておらず、明治初年に撮影されたと推測^{すいそく}される写真（図1）が今回の復元の有力な根拠資料となります。復元予定地は市道上に位置するため、現在、市道の付替^{つけかえこうじ}工事を並行して進めており、新市道の開通は令和9年度当初を予定しています（図2）。

今回の復元整備は、史実に基づいた復元を目指すということで、令和2年に決定した文化庁の『史跡等^{しせき}における歴史的建造物の復元等に関する基準』を参酌^{さんしやく}しております。この基準は、平成の城郭^{じょうかく}再建ブームで鉄筋コンクリート造の城が各地で乱立し、文化財とは乖離^{かいり}した復元が

行われていることが背景にあります。基本計画の策定にあたっては、復元検討専門委員会を設置し、新潟市歴史博物館みなとぴあの館長を筆頭に、長岡造形大学の准教授、文化財調査審議会委員、歴史図書館の学芸員、計4名の先生方にご審議をいただきました。

文化庁の基準では、歴史的建造物を再建するにあたり、史跡が持つ価値を正しく理解するための整備となっているかどうかを重視します。今回の整備について言えば、新発田城の何を伝え理解してもらうのか、そしてその先に何を指すのかが重要になります。復元と聞くと、完成した土橋門そのものをイメージされる方も多いかと思いますが、実際は工事に至るまでの調査や検証の過程が非常に重要になります。むしろこのプロセスこそが復元と言われることもあります。

通常の復元では、古い設計図や写真、文献などの資料、さらには発掘調査^{はくつちやうさ}の結果^{もと}に基づいて行われることが多いですが、土橋門については設計図等が発見されていません。そのため、写真（図1）と数枚の絵図（図3）を頼りに、かつての姿を再現しなければなりません。位置一つ決定するにも、資料を集めて仮説を立て、その仮説に基づいて発掘調査^{はくつちやうさ}を行い、妥当性^{だとうせい}を慎重に検証する必要があります。さらに、他の可能性がないことをあらゆる角度から確認をして、結論を導き出さなければなりません。特に、他の資料の存在がないことを立証するのが非常に難しいため、復元作業はしばしば正解のない問いの答えを探し続けるような面があります。

清水園^{しみずえん}の大門（図4）は、かつて新発田城内にあった門を移築したものとして土橋門の有力な類例と考えられていましたが、今年度の基本設計の中で土橋門の規模については、清水園大門とは異なることが判明しています。清水園大門は正面約5.7m、側面約2.7mなのに対し、土橋門は古写真を検証した結果、正面約7.3m、側面約2.8mであると推測されました。清水園大門は新発田藩家老の屋敷から藩治政庁^{はんちせいちやう}、役場から現在地に移されたという経緯があります。一方、土橋門は新発田城^{ぼうぎよ}防^{かなめ}御の要であり、城の縄張りを示す重要な門でした。また、清水園大門は茅葺^{かやぶ}きですが、土橋門は当初瓦葺^{かわらぶ}きだったとされており、復元も瓦葺きで計画されています。

土橋門と復元の意義

なぜ土橋門の復元が望まれているのか、土橋門の特徴について説明します。

城郭建築には枡形虎口ますがたこぐちと呼ばれる、非常に防御力の高い出入口の構造がありますが、新発田城表門は平入りの単純な構造をしています。ではどうやって敵の侵入を防いでいたかという点、「土橋、土橋門、堀、土塁どるい、土塀」の配置を工夫することで地形により枡形虎口のような構造を形成していました(図5)。これが非常に特徴的で面白いと言われていました。往時の人の知恵と工夫を知り、彼らが見た世界に思いを馳せる瞬間、この場所には多くの物語、人々が生きた証あかしが宿っていると感ずることが出来ます。

2つ目の特徴は、土橋門が土地利用の境界点であるということです。土橋よりも先は藩主の居住・執務エリアとなっており、家臣の屋敷はありませんでした。また、馬や乗り物での登城は許されず、土橋の手前で馬から降りて徒歩で登城しなければなりません(図6)。

昨年公開された映画『十一人の賊軍』の中で、家臣が馬に乗って表門の中まで入っていくシーンがありましたが、あれは史実とは異なる演出です。本来は騎馬きばで登城することが許されない、非常に格式高い空間でした。

ここで皆さんに質問です。新発田城と聞いて思い浮かぶのはどの姿でしょう。新発田城の顔、本丸表門ですか？ 石垣と桜との構図が美しい旧二ノ丸隅櫓でしょうか？ 事実上の天守閣、三階櫓でしょうか？ それとも堀部安兵衛の運命を決めたとされる辰巳櫓たつみやぐらでしょうか？

本来「城」とは建物だけを指すのではなく、堀や土塁などの構造物や曲輪くまわなどを含んだエリア全体を指します。ですから新発田城というのは本丸、二の丸、三の丸全体を指すこととなります(図7)。現在ですと中門はアイネスしばたの入り口あたり、大手門は新発田警察署あたりです。つまり新発田城は、その多くが失われ、現在はごく一部しか残っていません。市役所第3・第4駐車場を利用した時に、ここが城内だと感じる方はほとんどいらっしゃらないと思います。城を構成する要素が失われるとともに、人の記憶からも新発田城は消えていきます。だからこそ、今もなお残っている新発田城とその周辺いこうの遺構を守り、後世へつないでいくことが我々の責務となっています。

新発田城は国の重要文化財である本丸表門(図8)、旧二ノ丸隅櫓(図9)に加え、石垣や堀も現存しており、復元された三階櫓(図10)と辰巳櫓(図11)を含めて、立体的な城郭空間じょうかくくうかんを形

成していることが評価され、日本百名城や歴史公園百選に選ばれています。今回の整備では、現在の歴史的景観との調和を図りつつ、その価値をさらに向上させるような整備計画にしなければなりません。安易な復元や修景整備は、城に対する誤解を招くだけでなく、歴史的景観を損なう可能性もあるため、慎重に進める必要があります。

整備計画とその方針

土橋門については、先に申し上げたとおり史実しじつに基づいた復元を目指しますが、土橋門に関連する土橋、土塁、土塀、堀に関しては、復元の根拠となる資料や調査が不十分であることから、現時点での復元は難しいという結論に至りました。しかし、これらの要素は新発田城に対する理解を深める上で非常に重要であることから、本整備では舗装ほそうや植栽しょくさいなどで平面的に表現したいと考えております。また、将来的な復元を見据え、今後に余地を残した整備を行います。

平成22年に県立新発田病院跡地活用整備計画を策定し、土橋門の復元を掲げてから15年という長い年月をかけ、ようやくここまで進めることができました。しかし、今回の整備はゴールではなく、むしろ新発田城を盛り上げていくためのスタートラインに立ったのだと考えています。まずは土橋門の復元を着実に成し遂げることを目標とし、その後のさらなる発展を見据えていきたいと思ひます。

復元整備計画は、①史実に基づいた土橋門復元を目指すことにより城郭としての魅力を高める②表門前の道路を美装化びそうかし、往時の登城ルートを実際に歩くことができるようにする③実質的な正面口である土橋門を復元することにより、新発田城が持つ本来の奥行きを感じることができるようにすることを目指しています(図12)。

新発田城は、本丸表門の中だけを「お城」と思っている方が多く、実際に来城すると「あまり奥行きがない」と感じられるようです。今回の整備では表門の前方にある二の丸部分を再整備する内容になっており、土橋門が城への最初の入り口と認識されるようになり、新発田城の奥行きを感じることができるようになります。

そして④道路によって分断されていた史跡エリアと、特別養護老人ホーム跡地を含む遺構エ

リアを一体化し、公園としての魅力をさらに向上させます。現存する土塁は、往時の様相を色濃く残した価値の高い遺構として、専門家から高く評価されています。将来的には史跡としての指定を目指し、史跡公園として基本設計を着実に進めます。

今後のスケジュールは、今年度中に発掘調査の結果をとりまとめます。そして、令和8年度に実施設計、9年度に付替道路が開通した後、土橋門の工事着工、10年度の完成を目指していきます。

本整備は土橋門復元を中心に据え、新発田城を拠点としたさまざまな活動やイベントを通じて、市民の皆様の興味関心を高めることを目的としています。そして新発田城に愛着を持っていただき、シビックプライド醸成^{じょうせい}につなげたいと考えております。また、市民の皆様ひとり一人が新発田城をより深く知って魅力を実感し、自ら発信していただくことで地域資源の価値を高める好循環^{こうじゅんかん}を実現したいと考えております。人が集まる場所には自然と経済活動が生まれ、商工振興や観光資源としての価値向上にもつながります。

さらに、市外から注目を集めることで、シビックプライドはより深まり、地域全体が誇りを持てるようになります。この好循環を目指す第一歩は、市民の皆様に新発田城を好きになっていただくことです。そのためには地域全体で協力し、新発田城の価値を高めていく努力が重要だと考えます。

土橋門復元を知ってもらう取り組み

土橋門の復元は、新発田城を核とした歴史文化のまちづくりの出発点となるものです。よく「人づくりなくしてまちづくりなし」と言われますが、このプロジェクトを成功させるためには、より多くの方に土橋門の復元計画を知っていただきご理解いただくこと、そしてともに盛り上げていくことが重要であると考えております。このために文化行政課では、次のような新たな取り組みを行っています。

4月11日、新発田城初の夜間公開を実施しました。通常閉場する17時以降の3時間半で約900人にご来場いただき、「普段とは違うお城がきれいだった」と好評を得ました。同時に「ももクロ春の一大事2025」開催を記念し、お城をメンバーカラーにライトアップしました(図13)。

また、「しばたの心継承プログラム」として本丸中学校と「新発田城を学ぼう伝えようプロジェクト」を実施しました(図14)。職員が講師となりお城の魅力を伝えた後、生徒たちがお城を盛り上げるアイデアを話し合いました。「お城でキャンプ」「ゆるキャラの制作」「こども縁日の開催」など、ユニークな提案が寄せられています。観光ガイドボランティアや市職員からは、「薄暗いお城で新発田城の怪談話を語る」「浴衣デーを開催」「ライトアップとコンサートの実施」など、多彩なアイデアが集まっています。個人的には、かつて新発田城の年中行事であった端午の節句^{たんごせっく}を復活させたいと考えています。地域全体で新発田の子供たちの健やかな成長を願うイベントを新発田城で開催するという企画はいかがでしょうか。皆さんもきっと面白いアイデアをお持ちだと思います。ぜひ機会をいただければ、一緒に楽しい企画を考えましょう。その企画が地域や企業の発展につながれば、なお良いと思います。

※シビックプライド=まちや地域に対する市民の愛着^{あいちやく}や誇り^{ほこり}



図1 古写真(土橋門)



図2 計画範囲



図3 新発田城鳥観図



図4 清水園大門



図9 旧二の丸隅櫓



図10 三階櫓



図11 辰巳櫓

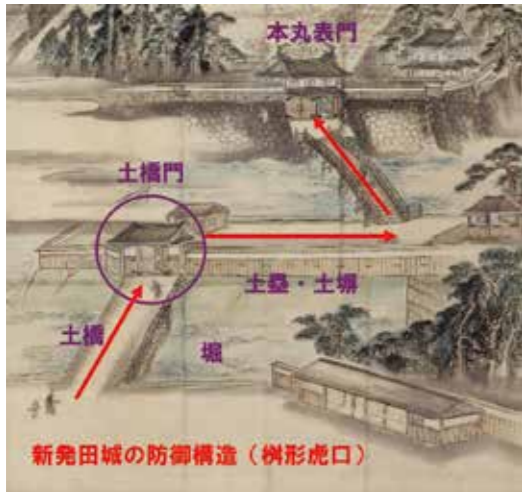


図5 新発田城の防御構造 (樹形虎口)

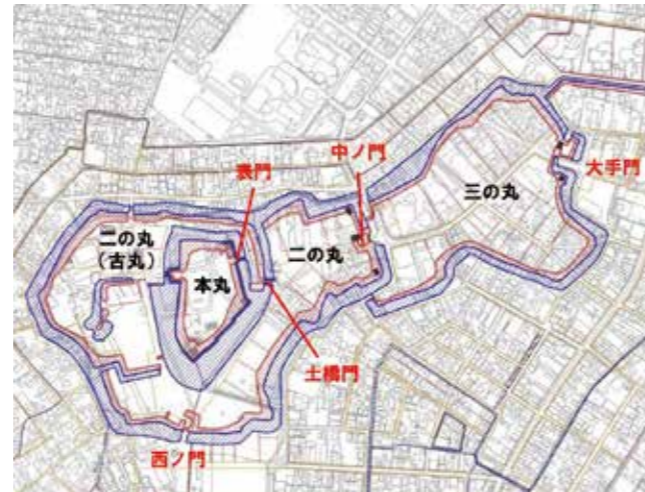


図7 新発田城の範囲



図12 整備イメージ図



土地利用の
境界点

↑ 格式が
高いエリア

図6 新発田城の
境界点



図8 表門



図13 ももクロカラーライトアップ



図14 本丸中プロジェクト

新発田市教育委員会 文化行政課の石垣と申します。よろしくお願いたします。私は文化行政課の中でも、遺跡の発掘調査を担当する埋蔵文化財係に配属されています。日頃より埋蔵文化財保護行政につきましてご理解、ご協力を賜り、この場をお借りして感謝申し上げます。

本日のお話のテーマは、「新発田城の瓦^{かわら}」です。

近年、お城は大変人気があり、公益財団法人日本城郭協会^{じょうかくきょうかい}が選定した「日本 100 名城」・「続日本 100 名城」のスタンプラリーが実施されるなど、全国のお城を見に行かれています方が多くいらっしゃいます。お城へ行く楽しみはスタンプや「城カード」を集めるだけではなく、そこでしか買えない限定品の「御城印^{ごじょういん}」が売られたりもしています。新発田城の「御城印」の限定バージョンにはアヤメがデザインされ、きれいな透かし^すが入ったものになります(図1)。

お城の楽しみ方は、他にも色々あり、例えば「おもてなし武将隊^{かつちゅう}」ということで甲冑^{かちゅう}を着た武将のパフォーマンスが行われていたり、岡山県の備中松山城^{びっちゅうまつやまじょう}では「猫城主さんじゅーろー」がいて、人気を集めています。これまで観光客が少なかったお城でも、SNSの投稿によって、人気に火が付くこともあります。また、「プラタモリ」や新発田城も取り上げていただいた「最強の城スペシャル」などのテレビ番組がきっかけで、お城に訪れる方も少なくありません。これらの影響で、日本の観光客も増えていますが、特に海外の観光客がお城を見に来ております。

＊

初めに、新発田城の概要についてご説明します。新発田城は本丸、二ノ丸、三ノ丸からなります。三ノ丸の入り口、大手門の位置は、現在の警察署の辺りになります。本丸の部分だけを新発田城と思われている方もおられますが、新発田城全体の規模は、南北が約 1.1 キロメートル、本丸・二ノ丸の幅が約 450 メートルで、三ノ丸まで含めると、非常に大きいお城になります。

本丸に位置する表門は、寛文 8 (1668) 年の火災で焼失し、後に再建された江戸時代の建物

になります(写真2)。新潟県内で、お城に江戸時代に建てられた木造の建造物が残っているのは、新発田城だけになります。

表門とともに、旧二の丸隅櫓も重要文化財です(写真3)。旧二の丸隅櫓の位置には、元々は鉄炮櫓が建てられていましたが、かつて二ノ丸の北西側に建てられていた乾櫓^{いぬいやぐら}を鉄炮櫓のあったところに移築した経緯があることから、現在、旧二の丸隅櫓という名前で呼ばれています。この櫓も寛文 8(1668) 年の火災で焼けてしまいましたが、その後に描かれた江戸時代の絵図に乾櫓が記されていることから、江戸時代に再建されたことが分かります。

平成 16 年に復元された三階櫓(写真4)、辰巳櫓^{たつみやぐら}(写真5)は、絵図、古文書、古写真、発掘調査の成果を基に、木造で復元されています。

次に、新発田城で行われた発掘調査について、ご説明します。発掘調査は、これまでに大小合わせて 30 箇所以上で行われています。今年に関しては、土橋門整備事業や市道整備事業などがあり、3 箇所が発掘調査を行いました。新発田城は、かつて何もなかったところに建てられたお城と思われている方もいらっしゃいますが、発掘調査によって室町時代から戦国時代の遺跡が見つかっており、新発田氏の館^{やかた}が存在していたと考えられます。さらにその下から、平安時代の遺跡も見つかっています。発掘調査の写真を見ると、建物の柱の跡が多く見つかっており、何度も建物を建て替えていることが分かります(図6)。

発掘調査では、様々なものが見つかります。遺構^{いこう}には建物や井戸、ゴミ捨て場の跡があります。遺物^{いまりやき}には伊万里焼^{からつやき}や唐津焼^{びぜんやき}、備前焼など、日本各地の焼き物があり、そのほかに中国で作られたものもあります。焼き物だけではなく、木製品も出土します。木製品は、土に埋まってしまうと腐^{くさ}ってなくなってしまいますが、新発田城は現地表面より 1m くらい掘ると水がしみ出してくるような環境のため、木製品が腐らず残ることが多いです。木製品の種類には、食器^{まげもの}や曲物^{げた}、下駄^{げた}などがあります。石製品には硯^{すずり}や砥石^{といし}、石臼^{いしうす}などがあります。とりわけ多いのが瓦^{かわら}です。当時の溝からは大量の瓦が出土しました(写真7)。

ここから、瓦についてお話していきます。元々、戦国時代のお城には、瓦は葺^ふかれていませんでした。お城に瓦が葺かれるようになった一つの契機^{おだのふなが}が織田信長が造った安土城^{あづちじょう}です。この

時に、初めて大名の城に瓦が使われるようになったといわれ、その後、全国の城に瓦が普及したと考えられています。

織田信長や豊臣秀吉が造ったお城は、後の城造りにも大きな影響を与えています。礎石建物と言って、瓦屋根と太い柱を支えるために、柱の下に大きな石を敷いて、建物が建てられました。瓦には金箔を貼ったりして、お城の威厳を示しました。石垣についても、従来は高さが1～2メートルと低いものでしたが、豊臣秀吉が活躍する時期には、高さが10メートル程度の石垣も造られるようになりました。

新発田城の屋根はどうだったかという、築城当初の絵図を見ると、最初は木の板を貼った柿葺きが主体だったと考えられます。寛文8年の火災の前後で、徐々に瓦葺きへ変わり、明治に入ってから直した部分では、棧瓦と呼ばれるものを使用しています。それに対して、藩主の御殿や家臣の屋敷には瓦を葺かずに、板葺き、茅葺きの屋根が主体だったことが古写真などから分かります。

瓦の葺き方には、丸瓦と平瓦を組み合わせて葺く本瓦葺きと、棧瓦と呼ばれる丸瓦と平瓦を合わせたような形の瓦で葺く棧瓦葺きの2種類があります(図8)。本瓦葺きは城郭や寺院などで採用され、棧瓦葺きは屋根の重量も軽減できるため町屋などで採用されました。

瓦には大きく分けて2種類あります。表面の色が黒い瓦と赤い瓦です。黒瓦、または燻し瓦は、素焼きの瓦ですが、瓦の表面を丁寧に磨き上げてから焼くことで、炭素を吸着させて、黒く仕上げます。三州瓦、姫路瓦などがこれに当たります。

一方、赤瓦は鉄分を含んだ釉薬をかけて焼いた瓦で、耐水性が良く、雪国で多く用いられます。特に有名なのは福島県会津若松市の鶴ヶ城です。新発田城では、黒瓦と赤瓦を櫓や門によって使い分けていたようです。

この2種類のほかに、新発田城では見つかっていませんが、瓦自体に金属板を貼った銅瓦、石を削って作った石瓦を使うお城もあります。

瓦の中でも、軒先に飾るものは軒丸瓦、軒平瓦と言い、家紋などの模様を付けてお城をきれいに見せたり、当主の存在を示したりします。新発田城から出土した軒丸瓦の文様には、三巴紋と連珠三巴紋があります(写真9)。巴紋には防火や魔除けの意味があると言われ、お城の軒先に

はよく用いられるデザインになります。軒平瓦は、一見どれも同じように見えますが、中央部分を見ると、橘、菊をモチーフにしたり、私たちは「八の字状文」と呼んでいますが、何をモチーフにしているか分からないデザインのものもあります(写真10)。

屋根を葺くために、大量に必要となるのは丸瓦と平瓦です(写真11)。新発田城から出土した丸瓦には、赤瓦と黒瓦がありますが、大きさが異なります。自衛隊の白壁広報資料館の屋根が、赤瓦と黒瓦を組み合わせたような葺き方をしていますが、遺跡から出土した瓦は赤瓦と黒瓦で大きさが異なることから、新発田城では、建物によって赤瓦と黒瓦を使い分けていたと考えられています。

それから鬼瓦言いまして、屋根の先端に葺く瓦があります。新発田城では、赤瓦で五階菱が中央に配置された鬼瓦が使われていました(写真12)。

遺跡から見つかった瓦には、文字を刻んでいたものもありました。例えば、黒瓦に「宝暦九卯」(1759年)の年号が記されたものがあります。このように、年号が記された瓦は大変貴重な資料になります(写真13の左)。

ほかにも、直径1cmくらいの花びらの形をした判子が押された瓦も見つかっています(写真13の右)。これは瓦を作った工房の印だと考えられます。そのほかに、「大坂 瓦師 中山市郎右衛門」と読める縦3cm、横1.5cmほどの四角い判子が押された瓦があります。大坂は産地、瓦師は瓦職人であること、中山市郎右衛門は個人名を示していると考えられます。このように瓦には、自分が作ったことや、どの工房で作られたかを示す判子が押されているものもあります。

*

当時、どのように瓦が作られたかを解説します。はじめに、大きな粘土(タタラ)の塊からコビキと呼ばれる道具で一定の厚さの粘土板を切り出します(図14)。丸瓦の場合は、布袋を巻いた筒形の型に粘土板を押しつけて、乾いてから型を抜き、半分に割ります(図15)。瓦の種類には、赤瓦と黒瓦があると言いましたが、黒瓦の場合は整形後に丁寧に磨いてから、赤瓦の場合は釉薬をかけてから焼きます。焼成については、黒瓦は低温でじっくり燻すような焼き方をします。だるま窯と呼ばれる簡易な窯を uses。釉薬がかけられた赤瓦は、山の斜面に築いた登り窯で焼きます。先ほど、大坂で作られたことを示す刻印がある瓦をご紹介しました。

新発田城の瓦が全て大坂から入ってきたものとは考えにくく、新発田でもどこかで作っていたと思われていますが、まだその遺跡は見つかっていません。だるま窯だと遺跡の調査では見つかりにくいのですが、探すことできたら良いなと大変関心を寄せています。

最後に、新発田城の復元と復元瓦についてご紹介します。平成14年から16年かけて復元した三階櫓、辰巳櫓は絵図、古文書、古写真などから得られた情報に基づき設計され、建物の配置は発掘調査の成果が踏まえられています。発掘調査によって、柱の位置には大きな礎石が敷かれており、礎石が見つかったことで、柱と柱の間隔が分かりました。実際に櫓を建てる際には、可能な限り伝統工法が用いられました。

瓦についても、発掘調査で出土した軒丸瓦、軒平瓦を可能な限り忠実に再現して復元建物に葺かれています(写真16・17)。復元建物に葺いた瓦は、辰巳櫓で1万枚以上、三階櫓で1万7千枚以上です。辰巳櫓では、発掘された瓦を修復した瓦も葺かれています。辰巳櫓の階段を上って左手の窓から覗いていただくとご覧になれます。

余談になりますが、2025年春に「ももいろクローバーZ」さんが新発田城を訪れたときに、復元瓦にサインをいただきました(写真18)。冬季は閉鎖しておりますが、辰巳櫓にはサイン瓦が展示してありますので、春になりましたらこちらも是非ご覧ください。

屋根の葺き方にも伝統工法が用いられています。瓦の下に柿板と呼ばれる薄い板を並べ、仮に瓦が破損しても、水漏れを防止することができる土居葺きという工法を用いています。発掘調査では、溝から屋根材とみられる柿板が見つかり、その板を調べた結果、スギであることがわかりました。櫓の復元時には、サワラという材が使われました。土居葺きの次に、丸瓦と平瓦を組み合わせた本瓦葺きが行われました。これからは建物だけではなく、屋根にも注目していただければと思います。



図1 御城印(新発田城)



写真2 表門



写真3 旧二の丸隅櫓



写真4 三階櫓



写真5 辰巳櫓



図6 発掘調査の概要

写真:新発田市教育委員会撮影



写真7 瓦の出土状態

新発田城跡から出土した鬼瓦



写真12 鬼瓦

線刻・刻印のある瓦



写真13 線刻・刻印のある瓦

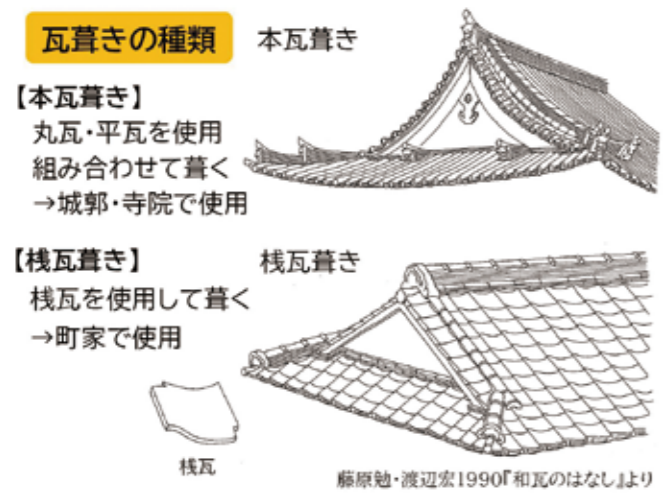


図8 瓦の葺き方



写真9 軒丸瓦



写真10 軒平瓦



写真11 丸瓦・平瓦

瓦の製作方法について(江戸時代)

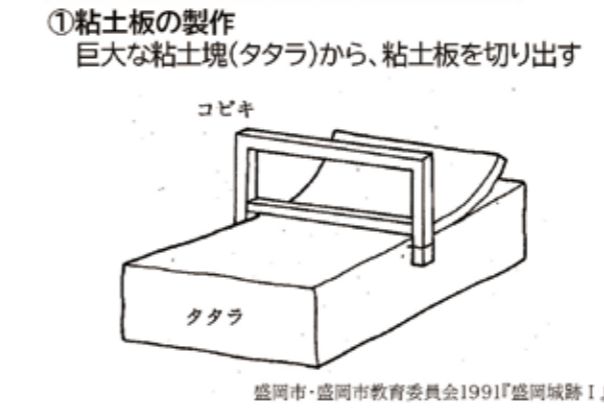
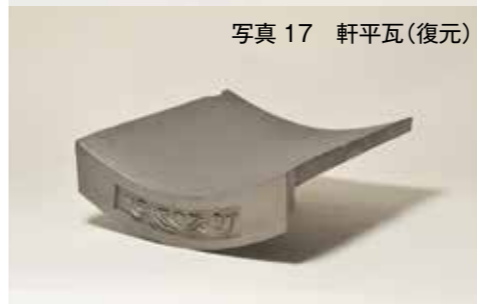


図14 粘土板

瓦の製作方法について(江戸時代)



図15 丸瓦の作り方



8 水に浮かぶ新発田城

新発田建設(株) 社長 渡邊 明紀

新発田城について、施工した立場からお話をさせていただきたいと思います。今回この場をいただいて資料をまとめるに当たって、三階櫓の復元には本当に多くの方が携わったということが改めて分かりました。復元の機運を盛り上げたり、市民にその価値を伝えたり、復元後にボランティアをされている方々に、心から感謝申し上げたいと思います。そして、建設技術者として成し遂げるべきもの、と言うと大袈裟かもしれませんが、歴史的価値あるこのような建物に携わらせてもらって本当に良かったと感謝しております。

父の話をさせていただきます。父は昭和8(1933)年生まれで東日本大震災の2011年に亡くなりました。65歳の時に「城下町新発田の成立と近代化に関する研究」という論文で工学博士号をいただきました。これは新発田の街路、町の造りがどうできているか、軟弱地盤の上にお城を造るといのがいかに技術的に難しかったかなどを研究したのですが、実に幸せだったことに自分が興味を持って研究したデータが復元の設計にあたって実際に使われ、復元に寄与することができた。そして幸い当社が復元工事を受注させていただき、実際に造ることができた。これはもう、技術者冥利に尽きる話です。ありがたいことで、父とともに感謝しています。

新発田城の築城には50年ほどかかっていますが、もともと関ヶ原の戦いが終わったあたりから城の縄張りを決めたり石垣を積み始めており、今回溝口の殿様が新発田に来てから、これで400年ということでお城を復元することになりました。

本日のテーマは「水に浮かぶ新発田城」ですが、実際の新発田城は「沼地の城」だったということです。なぜあの場所だったのか、そして軟弱地盤の上はどう建物を建てていったのか、そもそもあそこは沼だったということ、ぜひ覚えていただきたいと思います。

現在の新発田城の場所は、新発田重家の館をはじめ平安時代からの遺構がそれなりにあったのですが、溝口家入封当時の防衛、政治の中心は五十公野でした。その後溝口の殿様は現在地

をお城の場所選ばれた。

新発田城(図1)は三の丸、二の丸、本丸とありまして、本丸のところに先日お話された土橋門があり、ここを渡ると表門、辰巳櫓があり、鉄砲櫓のあったところには隅櫓が移築されています。そして古丸と言われる現在の本丸の北側は新発田重家時代の本丸跡です。いま石垣が残っているあたりを除けば石垣はなく土塁が築かれ、二の丸にはかつて二の丸病院があり、三の丸には警察署があり、寺町は現在のままで、当時の街の骨格と現在の街の骨格は同じだということ言えると思います。

皆さん既にご存じと思いますが、新発田の語源はアイヌ語で「鮭の捕れる場所」ということでシビタ、もしくは州の端、つまり水辺のほitoriという意味でスパタと言われます。要は沼地でした。古地図を見ますと山から水が流れて砂丘で止められ、かつては紫雲寺潟(塩津潟)と福島潟があり、新発田はその間にあります。阿賀野川は日本海には抜けていなくて蛇行して信濃川と合流し、加治川、落堀川も砂丘を抜けていなくて蛇行して阿賀野川に合流していました。ですからこのあたりは全部沼地だったということです。五十公野はこの中にあって麓の山城として、会津街道、三国街道、奥羽街道の交通の要衝であり、そこを根拠に新発田重家(図2)が活躍したということです。

古丸のあたりから平安時代の土器が出てきていますが、等高線を見ると新発田城のあたりは低湿地の中で少し高いところがありました。新発田重家は加地一族佐々木盛綱の末裔、揚北衆の中の有力武将で、当時はこの少し高くなっている古丸にいたということです。そして上杉謙信家臣団の中核として川中島で戦い、跡目争いの際には上杉景勝を支えたのですが、後に上杉景勝と戦うことになりました。法正橋、馬場工務店さんのあるあたりですが、ここへ上杉景勝の軍が来て、沼地でしたので馬が1列しか並べず大軍には不利でした。この戦いで上杉景勝を討ち取っていれば、新発田が越後の覇権を取っていたかも知れません。ただ、その日は雨があまりにもひどすぎ、また多勢に無勢だったこともあって討ち損じ、その数日後に新発田重家は五十公野・赤谷の戦いに敗れて自害しました(諸説あり)。

五十公野城は山から高地が伸びた先端にありまして、上杉景勝は本陣の山の上から、

直江兼統の軍は豊田神社のあたりから攻め、五十公野川の対岸からも上杉勢に囲まれて滅びます。多勢に無勢ということではありましたが、この山際での戦いで防御に不利とわかり、後の城の位置選定で平城を選ぶことになったと言われております。現在の新発田市中心部のある五十公野の北西側は、当時舟を使って移動するような沼地でした。しかし複数の街道が交差する五十公野は敵に囲まれやすく、沼地の中で防御した方が良いのではないかとということで、築城技術も干拓技術も進んで参りましたし、新発田の町中にお城を建てたのではないかなと思います。

新発田城の歴史を見ますと、関ヶ原の戦いの2年前に溝口秀勝が入封して最初は五十公野に住みます。そして関ヶ原の戦いから2年後に石垣を積み始め、約50年後の1654年によくお城が完成します。その後火事で燃えたり地震で石垣が崩れることが数回ありました。1789年には地震ではなく軟弱地盤が石の重さに耐えられず石垣が崩れてしまいます。明治5年にはお城が取り壊され、荷重がなくなったお陰で石垣が今まで残ったということです。

新発田城の防衛は先ほどお話ししたように三方が田んぼですから、自然の要塞になった。敵が来るとすれば必ず五十公野を通過して来る。ですから五十公野側、今の上鉄砲町や東町の方をまず防御すれば良いということで、そちらの方に足軽長屋、鉄砲町、武者だまりがあって寺町がある。すべては会津への防備のためのまちづくりがなされたということが、まちの形から分かります。あの強力な上杉勢は、会津からその後米沢へ移りますが、その後も会津藩に対してどう防備するかがまちづくりの基本でした。

石垣の積み方(図3)は、三階櫓から鉄砲櫓、隅櫓、表門、辰巳櫓は切込接ぎという精緻な積み方をしています。お堀の水抜き調査をした時に東大の先生が褒めていらっしゃるほど見事な積み方です。これもやはり会津側は防御のために石を積もうということだったのではないのでしょうか。石材は五十公野の古寺というところの古寺石と呼ばれる安山岩を持ってきて、加工して積んであります。良い石があって、非常に良い水路もあって、運搬にはあまり困らなかったと思いますが、精緻に積んでも弱い地盤のせいで崩れるものですから、他の場所は土塁でやったということです。

表門の横の石垣の角を見ますと、石を長方形に加工して左右、左右と積み重ねてエッジを出しており、大変精巧な積み方をしています。織田信長が安土城を作った時に穴太衆という石垣を積む集団、テクノクラート(技術者たち)ができました。その人たちが全国を回り、こうした積み方を広めていったと言われます。史実ははっきりしませんが、新発田城も穴太衆がいなかったらこういう積み方はできなかったのではないかと考えています。

*

さて、ここから平成の復元についての話になりますが、三階櫓に絞ってお話をします。三階櫓は皆様もご存じでしょうが、天守閣の代わりであったと聞いています。溝口の殿様は外様大名でしたので、天守閣を持たせてもらうことができませんでした。この三階櫓を天守閣代わりにして、本丸の中に本丸御殿という平屋の住まいを建て、そこで政治を行っていました。

三階櫓(図4)の特徴は、棟がT字型で上に鯨が三匹載っているところにして、なんでこうなっているのか誰も分からないそうです。攻めてきた敵に方向を錯覚させるためとも言われますが、本当のところは文献が残っていないのでわかりません。普段は武器庫、物見櫓として使われていました。

技術的なトピックを5つお話しします。まず一つは三階櫓の古写真(図5)が残っていたことです。それから永平寺のお抱え大工さんはかなりサポートをいただいたこと。できるだけ昔のまま残そうと、当時と同じ漆喰の壁を用いていること。それから石垣は何度も崩れていますから、崩れないよう石垣の補強工事をしたことです。三階櫓自体も崩れないよう構造に技術的な工夫をしています。400年ぶりの建設だから、今後数百年壊れないものを作りたいという思いの方が多く、そのためにさまざまな工夫がなされました。

まず古写真による検証です。明治に入って各地で不平士族の反乱を恐れて、城を壊せと明治政府の指示があり、新発田城は明治5年までは三階櫓がありましたが、石垣を残して上の建物は壊してしまいました。建物は壊しても柱の下に置いた石は残っていましたから、柱の位置は分かります。しかし、復元にあたり、それ以外は写真がなければ正確な復元はできません。古写真がどの位置から撮影されたかを特定し、三階櫓の3Dモデルを作って軒の出はどうか、瓦は

何枚かなど、モデルをぐるぐる回しながら検証を重ねました。

こうしたことができたのは当時の領民が、お城が壊されるのを本当に悲しんで、どなたかが、あるいはみんなでお金を出し合っただけなのか、写真に撮って残しておいてくれたお陰です。

それでいざ造ろうという時に、地元で腕の良い職人さんは大勢いましたけれど、これだけの建築物を造ったことがなかったものですから、永平寺お抱え大工の山本さんという棟梁^{とうりょう}に来ていただきました。棟梁からは新発田、それから村上、阿賀北^{あがきた}の大工さんは力量十分ですよとお墨付^{すみつ}きをいただきましたが、歴史に残る建築を造るにはどうすればいいかという点では、やはり棟梁のお力と知恵が必要でした。山本さんは、各地の重要文化財を修復して回っている方で、全国に20人もいない技術と知恵を持った方でして、そういう方の助けを得て施工したわけです。

一つ典型的な例の話をして、普通木造の家を建てる時は土台を敷いてその上に柱を入れます。土台と柱を、最近では金具で留めますが、昔は土台を掘り抜いて柱を少し尖^{とが}らせ、「ほぞ」という加工を施して動かないようにするのが一般的です。通常の納まりですと、ほぞ穴は土台の途中までしか掘らないのですが、百年二百年経って土台が瘦^やせてしまったらグラついて鉛直^{えんちよく}荷重^{かじゅう}に耐えられなくなる。どうするかというと、土台を掘り抜いて柱の荷重^{かじゅう}を直接基礎で支える(図6)のです。そういう技法があることは知っていましたが「これが長年耐えられる納まりなんだよ」と改めて教えていただきました。永平寺の大工さんのこうした知識と工夫が随所に見られますので、新発田城は長年保ち続けていくのではないかと思います。

漆喰^{しっくい}の壁(図7)は当時と同じ素材、同じやり方で塗りました。自分たちで土を集めてきて土壁を作りまして、塗っては乾かし、水分が飛んだらまた塗ってと10回わたって繰り返して完成させています。塗るための土を作る時に、会社(新発田建設)の敷地に穴を掘って、そこへ土を運んで攪拌^{かくはん}しました。蕎麦^{そば}にもつなぎを入れるように、ボソボソした土をつなぐために海藻^{かいそう}、石灰^{せっかい}といったものを入れて、そのまま一冬寝かしました。配合を決めて、強度試験をして、塗ってテストをしてモックアップ(試作品)を作り、それから塗りました。土壁の中には小舞^{こまい}という、竹で組んだ下地に縄^{なわ}を垂らしたものをつくり、その上に土を塗って竹と土を一体化させます。何度も何度も塗って、最後の仕上げに漆喰を塗ります。

そして石垣。先ほどから沼地と申しあげましたが、築城には非常に不向きで、石垣は何度も崩壊しています。石垣の基礎(図8)というのは、そのまま石を置くのではなくて木ではしごを組んだところへ基礎となる根石^{ねいし}を置いて、その周囲に砂利^{じゃり}を入れて根固めします。お堀の水を抜いた時に当時の根石やはしごの一部を確認しました。多少腐食^{ふしょく}はありましたが水に沈んでいた木はまだきちんと残ってありました。石垣^{いはら}が孕まないように横に胴木を渡して崩落を防いでいた様子が確認できました。今回はこれに加えて水底に石を置き、土盤を固めています。

地質については過去のボーリングデータとともに防衛庁^{ぼうえいちょう}にもお願いしてデータを集めて調査をしました。何度も崩落している石垣が崩落しないようにはどうするか、また石垣の上に再度建物が建つわけですから荷重^{かじゅう}に耐えるにはどうするかを検討しました。石垣は、その上の建物の荷重で土が押され、石垣の外側の地面から上がってこようとする盤膨れという現象を起こし、これが起こることで石垣が崩れてくる。そこで梯子^{はしご}を作って長さ5mほどの松杭(図9)を打ち込んで石垣の足下を固めています。

かつて櫓^{やぐら}があった時に地面はその荷重に耐えていたのか、ということも検討しました。三階櫓の推定荷重が440t。石垣の上の面には1㎡あたり3.5tかかります。ボーリングデータで地盤が耐えられる重量は12.3tでしたから上の面は大丈夫だとなりました。しかし建物と土の重量がかかる、石垣の下のレベルでは大丈夫か?と思うと、荷重が1㎡あたり13.5tあるのに対して4.4tしか耐えられないという結果が出ました。ならばどうして櫓は建っていたのかという話になりますが、これに対しては50年かけてゆっくり、馴染^{なじ}ませながら造ったからとしか言いようがありません。それほど軟弱地盤であったということです。

建物の基礎の施工方法は繰り返しさまざま検討しました。石垣自体も重要文化財であるため、工法は石垣への影響を抑えるものでなければいけない。結論としては、細い鉄骨の杭をたくさん打ち、その上に中を空洞にして軽量化したコンクリートマットを置き、その上に三階櫓を造る(図10)というものです。ちょうど剣山^{けんざん}をひっくり返した上に三階櫓を載せるような形で、使用した鋼管56本、耐力885tですので2倍の安全率になる。錆^{さび}に耐えるよう肉厚のものを指定し、劣化しても50年で1mmの腐食^{ふしょく}であることを確認してから杭を打ち込みました。

ここまで、細かい話ばかりで申し訳ありませんでしたが、いろんな技術的裏付けの上で仕事をさせていただいたということです。

施工について写真とともに見ていきます(図11-1～図11-4)。木材については、節があるものはいけないと指示がありました。ヒノキやマツなど、どの柱にどの材料を使ったかは古文書に書かれていたのですが、それだけの太さの材がなく、^{たいわん}台湾ヒノキを使おうとしたら台湾はもう輸出をしていない。それでカナダへ問い合わせたのですが、結局島根県で良い柱が見つかり、それを運んできました。

2003年4月19日に^{じょうとうしき}上棟式をして皆さんに見ていただいて、それから壁を塗って屋根をかけて、^{しやち}瓦、そして鯨を載せました。

最後に申し上げたいのは、新発田城は沼地に建てた城であり、平安、戦国、江戸、そしてお城が壊された明治と、さまざまな歴史を積み重ねてきました。その上で平成の復元は、新発田城復元の会ははじめ多くの方々が機運を盛り上げてくださった上に成り立っています。特に自衛隊さんの協力は大きくて、当時の片山忠吉市長と、亡くなられた菊水酒造会長の高澤英介さんが非常に^{こんい}懇意にされていた。英介さんは、当時新発田におられて後に^{ばくりょうちょう}幕僚長になられた森勉さんと大変親しかった。お城を建てたいとなって、英介さんが森さんに会いに行って、自衛隊さんの協力が得られたということで、あのタイミングでなければできなかったと思います。公共工事ですので、私たちは工事の過程で写真を撮って報告するのですが、自衛隊さんの敷地には写り込んではいけないものもあります。「この角度で写真を撮っていいですか?」と確認したり、再度撮り直したり、自衛隊さんから最大限のご協力をいただいて仕事をさせていただきました。本当に大勢の方の協力があつた上での工事でした。

溝口の殿様が新発田にが来られてからちょうど400年、新発田市合併のシンボルということでの大事業でした。当時の技法の再現に、加えて現代の技術もさまざま用いられたこと、永平寺の大工さんの知恵、地元の大工さんの腕も含め、後世に残すべきだと思います。さらに復元に至るまでの大勢の人の努力や技術的な工夫を伝えていくことが大事なんじゃないかと思います。



図1 新発田城



図2 新発田重家

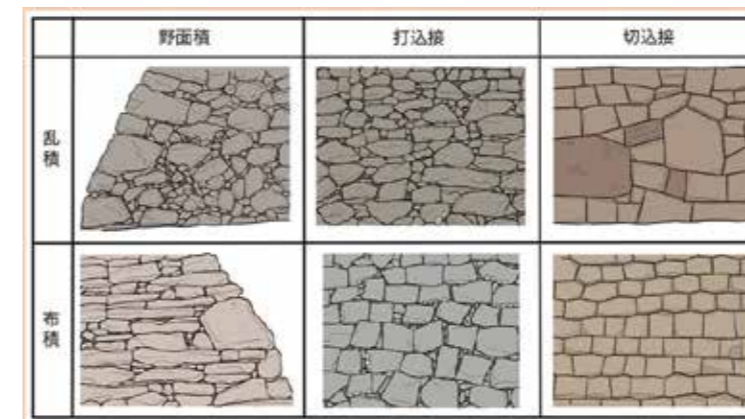


図3 石垣の積み方



図4 復元された三階櫓



図5 三階櫓の古写真

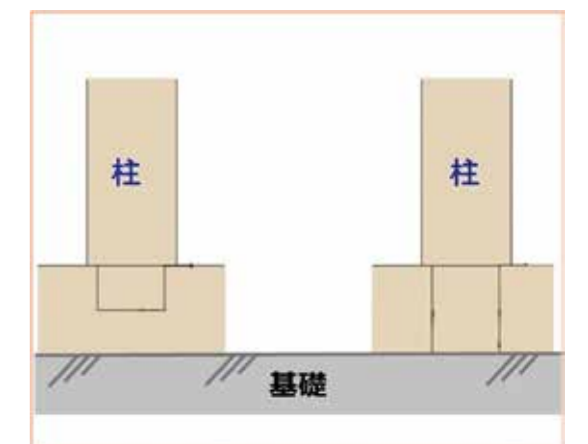


図6 土台



図7 漆喰

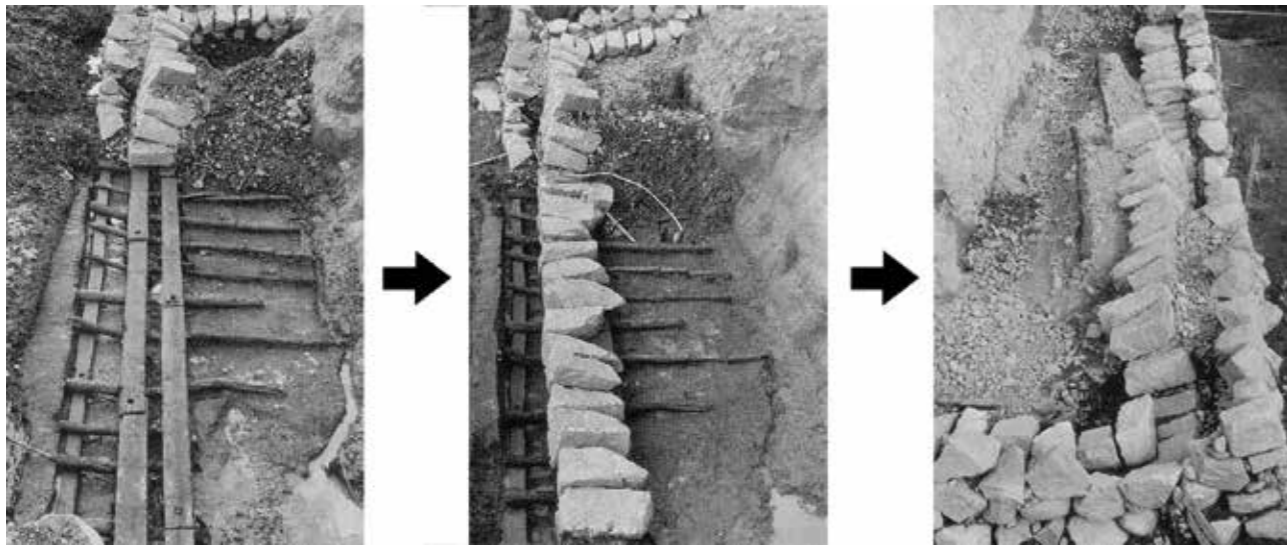


図8 石垣の基礎



図9-1 補強概念図

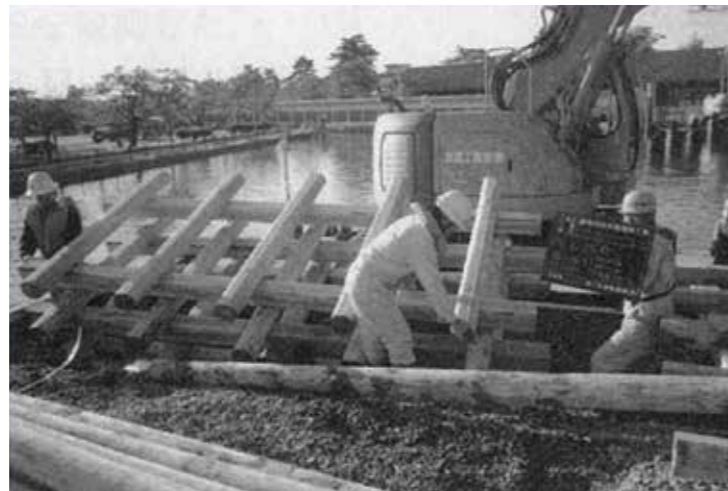


図9-2 梯子胴木

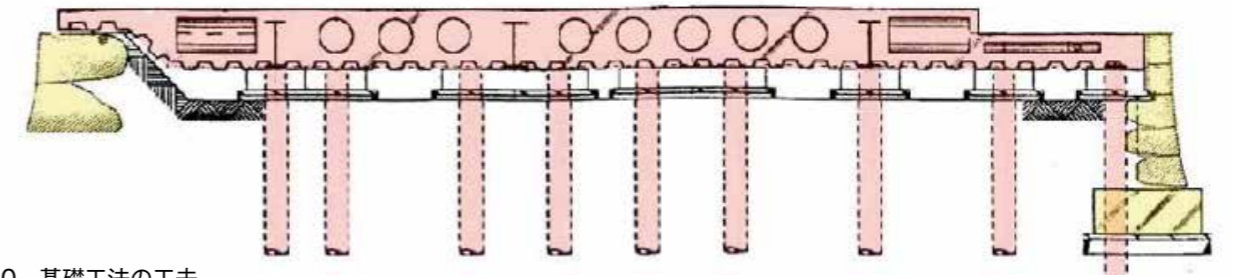


図10 基礎工法の工夫



図11-1



図11-2



図11-3



図11-4

9 近年の発掘成果

新発田市文化行政課 埋蔵文化財係 津田 憲司

新発田市教育委員会文化行政課の津田と申します。本日は、近年新発田市内で行われた遺跡の発掘調査についてお話させていただきます。最初に新発田城跡の調査、次に滝沢地区の遺跡に関する調査という順番で話をしていきたい思います。なお、遺跡の主な時代は、新発田城跡が江戸時代、滝沢地区は縄文時代となります。

初めに地図をご覧ください(図1)。左側は新発田城跡の、右側は滝沢地区遺跡の周辺地図です。ご存じの方も多いと思いますが、新発田城跡は市街地の中に位置しています。近くには市役所の本庁舎があります。滝沢地区は、新発田市と阿賀野市の市境付近に位置します。目印となる建物としては、少し離れていますが、旧本田小学校があります。なお、旧本田小学校は3月から「キネス本田」としてオープンする予定です。その旧本田小から南へ約1.5km離れたところに、発掘調査を行った滝沢地区の遺跡があります。滝沢地区では二つの遺跡を調査しましたが、現況はともに水田となっています。

では、新発田城跡の調査についてお話しします(図2)。新発田城跡では、近年に三つの地点で発掘調査を行いました。一つ目が、陸上自衛隊新発田駐屯地内で実施した調査(第28地点)です。二つ目が、特別養護老人ホーム二の丸のあった場所で行った調査(第33地点)です。三つ目が、新発田城の土橋門があったと推定される場所で行った調査(第34地点)です。

初めに、第28地点の調査についてです。この地点は、江戸時代後期の様子を描いた絵図面に照らし合わせると、御作事所という場所に該当します。御作事所とは、主に新発田藩の建築などに関係する業務を行う公用施設が置かれた場所です。調査は、令和3年度と令和7年度に実施しました(写真3)。特徴的な遺構として、幅が4.2m程ある大きな溝が見つかりました(写真4)。溝の両側面には木杭が打ち込まれています。これは、壁が崩れないようにするための土留めと考えられます。杭の間隔は20～40cmです。杭と杭の間は、下部に細長い木の枝を数段にわたっ

て巻きつけて、固定・補強していました。杭に使用している材は、分析の結果、マツやクリであることがわかりました。

この溝の中からは、たくさんの遺物^{いぶつ}が出土しました。ここでは特徴的なものとして、文字の書かれた木札について紹介します。この木札は、表側の上段に「越後新発田 湯浅半右衛門様 山田利兵衛様」、下段に「若狭や伊兵衛 大坂より」と書かれています(写真5)。宛名が新発田藩の湯浅半右衛門、山田利兵衛で、送り主は大坂の若狭や伊兵衛であることが分かります。何を送ったのかは、裏面に書かれていました。上段に「四寸釘壺筒 式千五百本宛」、その下に大きく「入」、下段に「貳箇之内」と記されています。湯浅半右衛門、山田利兵衛とともに、新発田藩士の系譜を記した書物に記載されている人物です。この兩名宛に、大坂の若狭やから四寸釘が納品されたことが、この札から分かります。次に、こちらの木札です(写真6の左)。「梶弾右衛門様 村松武大夫」と書かれています。梶弾右衛門は、先程述べた藩士の系譜を記した書物に、藩の重臣として名前が載っています。実は、新発田藩で起こった大きな騒動の一つに与茂七騒動というものがありますが、その裁きを行った人物の名前が梶弾右衛門です。この木札に書かれた梶弾右衛門と、騒動を裁いた梶弾右衛門が同一人物かどうかは、今後調査していかなければ分かりませんが、非常に興味深い資料だと思います。もう一人の人物、村松武大夫も、藩士の系譜を記した書物に名前がある藩士です。梶弾右衛門との関係は今のところよく分かりませんが、もしかしたら部下であったかもしれません。右側の木札についてです(写真6の右)。札の右側に「延宝七未二月より」、中央に「沢田長兵衛[㊦]」と書かれています。「延宝七未」は1679年にあたります。先程、この調査地点は新発田藩の御作事所に該当すると言いましたが、御作事所がこの場所に設けられたのは1680年のことです。つまり、この札に書かれた年代は、御作事所ができる前年と考えられます。では、御作事所になる前は、この土地が何に使われていたかということ、沢田長兵衛という新発田藩士の屋敷地でした。木札に書かれた人物名も沢田長兵衛です。この土地の使用変遷を考えるうえで、とても興味深い資料といえます。

次は、第33地点の調査についてです。市道整備に伴う発掘調査で、調査範囲は屈曲した細長い長方形となります(写真7)。この地点は、江戸時代後期の絵図面に照らし合わせると、御用

屋敷という藩の公的施設が設けられた場所になります。ただし、御用屋敷が具体的にどういった用途に使われた施設なのかは、よく分かっていません。調査は、令和6年度と令和7年度に行い、新発田城二ノ丸の堀や建物跡、さまざまな生活の痕跡などが見つかりました。これら検出した遺構の中には、井戸もありました(写真8)。これは桶状の井戸側で、直径が約60cm、高さが約1.2mです。実は、この上部にも高さ30cmほどの井戸側がはまっていたので、井戸側全体の高さは約1.5mであることがわかりました。そして、井戸そのものの深さは、調査の結果、約2mと推定されます。また、ゴミを捨てるための穴もたくさん見つかりました。穴の中には陶磁器類や漆器、木製品などが捨てられていました(写真9の左)。瓦ばかりをたくさん捨てた穴もあります(写真9の右)。私たちは、これを「瓦溜まり」と呼んでいます。おそらく、建物の建替えなどで、使わなくなった瓦を捨てたものだと思います。これらのゴミ穴から、興味深い遺物が見つかりました。「溝口内匠様御内 塚脇万平次 山本鏝左衛門 塩引五尺」と書かれた木札です。溝口内匠のもとに、塚脇万平次、山本鏝左衛門という人物がいたことがわかります。なお、「塩引五尺」は、塩引き鮭5匹だと思われま

す。続いて、第34地点です(写真10)。この調査は、土橋門の位置を確定するために行ったものですが、残念ながら、位置が確定できる門の礎石などの資料は得られませんでした。おそらく、現在の道路を造る際に上の部分が削られてしまったためと思われる。ですが、新たな知見も得られました。現在の地面が、江戸時代に80cm以上も盛り土して整地していることがわかりました(写真11)。黒土や砂、シルト、赤土が水平に盛り土されています。所によっては、斜めに盛り土されている部分もありました。付近の土塁についても調査を行いました(写真12)。調査の結果、一番下に黒土、次にシルト、その上に赤土という順に、土をきれいに盛って土塁が造られていることがわかりました。これらの土は、おそらく堀を掘った時の残土であろうと考えられます。また、土塁の上面からは、石の列を検出しました(写真13)。石の直径は10~20cmです。実は、城が写った昔の写真から、土塁の上に堀があったことが分かっています。この石列は、その堀の基礎ではないかと考えられます。

*

次に、滝沢地区の発掘調査についてお話ししたいと思います。同地区では、「北野地遺跡」と「堤下B遺跡」という二つの遺跡について調査を行いました(写真14)。北野地遺跡は縄文時代中期前葉、堤下B遺跡は縄文時代中期中葉という時代に該当します。縄文時代中期前葉~中葉とは、今から約5,500年から4,800年前に該当します。この地区には、ほかにも縄文時代の遺跡があります。このことから、滝沢地区は、すでに縄文時代から人々が暮らしていた地域であったといえます。

北野地遺跡では、埋没谷と呼称している地形が見つかりました(写真15)。見つかった谷の深さは約1.1mで、その下部から多くの土器が出土しました。土器はすべて壊れた状態で見つっています。そのほかには、砥石や妊婦をかたどった土偶なども出土しました(写真16)。なお、出土した土器の中には、接合・復元をしたところ、30cm以上にもなる大型のものもありました(写真17)。

堤下B遺跡では、川跡から多くの土器が出土しました(写真18)。川跡の深さは、現在の田面から約1.5mありました。そこから出土した土器は、いずれも当時の人々が捨てたものと考えられます。また、火炎土器(王冠型土器)も見つかりました(写真19)。接合・復元した結果、大きさが約30cm弱となりました。土器のほかには、土偶や大きさが4cmほどのミニチュア土器、石棒と呼ばれる男根を模した石の道具なども見つっています(写真20)。このように、両遺跡からは、土器をはじめとして、当時の人々が使っていたさまざまな道具が出土しました。

近年の新発田市内における遺跡発掘調査の成果については以上となります。

図1





図 2



写真 3



写真 4



写真 5

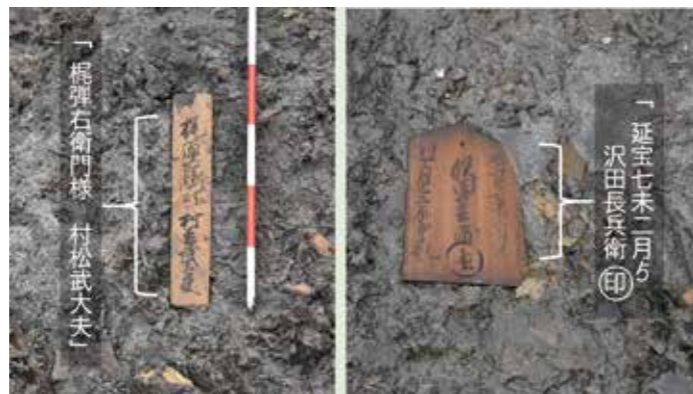


写真 6



写真 7



写真 8



写真 9



写真 10



写真 11



写真 12



写真 13



写真 14



写真 15



写真 16



写真 17



写真 18



写真 19



写真 20

はじめに～『報国説』について

大沼と申します。戊辰戦争(1868～1869)の話をしてくれということです。

戊辰戦争では新発田藩は「裏切った」と、大変不名誉なことを言われます。果たして本当に裏切ったのか。歴代新発田藩主は優秀な方ばかりで、特に8代藩主直養は学問を重視、以降幕末までおよそ100年にわたり、新発田藩領では学問を徹底してやってきました。そして戊辰戦争の16年前、10代藩主直諒は『報国説』を著して、幕府に見つかり大変だったのですが、村岡という老女を介して時の天皇にまで達したと言われております。

そこに書かれていたことは、国の恩というのは天皇の恩であるということです。天子は我が国の父母であり、幕府は統率しているだけだと。然るに庶民は將軍というものを知っているけれど天皇があることを知らない。これはあってはならないことだと書いている。国恩は天子の恩であって、幕府の恩ではない。民に二つの太陽はなく、王というのは天皇だけであるということを説いたのが、報国説なんですね。そして新発田藩の学問である山崎闇斎学も尊皇です。これが新発田藩の基本的立場であることを、まず頭に入れていただきたい。

戊辰戦争の始まり

昨年公開された映画『十一人の賊軍』をご覧になった方は？ なるほど、半分くらいの方は観られましたね。あれは、我々にとっては非常に不本意な映画でした。なぜかは追々分かりますので、話を進めましょう。

戊辰戦争前年の慶応3(1867)年10月、將軍徳川慶喜は大政奉還を決めます。これに伴って朝廷、及び將軍から10万石以上の大名は京へ上れという指示が出る。新発田藩はこの6年ほど前

に10万石の高直りをしておりましたので、京へ赴くんですね。藩主直正はまだ12歳でしたので、代わりに新発田藩江戸屋敷から窪田平兵衛（図1）が京に上る。これが戊辰戦争の始まりです。窪田平兵衛は『在京中公私留記』（図2）というものを残しています。15年ほど前に我々新発田古文書解説研修会の先輩が一言一句全部訳しました（図3）。戊辰戦争中の動きがこれによって全部分かる。江戸藩邸（溝口伊織＝図4）では、京の窪田平兵衛と密接なやりとりをし、国元新発田へも頻りに文書を流して天下の情勢を知らせ、判断を仰いでいた。

国元にいた若家老の溝口半兵衛（図5）も手記を残していて、「（同盟軍と新政府軍の）両方へ軍を出すというのは、自分にはとても耐えられない」と書いています。彼が主になって最終的に新発田藩の動きを全部収めるわけであります。

京の窪田平兵衛による1月4日の手記（『在京中公私留書』）は、大坂方面から幕府軍が入り、京都で薩長軍が迎え撃って幕府軍は大阪へ逃げ帰ったという事実関係、朝廷方が勝ったということで新発田藩はどうしたらいいかということで、隊長1名、物頭様々、兵士400名を早急に京都へ送ってくれと書いている。この書状によって新発田から200名、江戸藩邸から200数十名が京へ上って御所の警衛に就いています。御所のそばに新発田藩京屋敷を持っており、御所の動きを克明に知ることができました。それによって窪田平兵衛は的確な判断ができた。京都屋敷には寺田喜三郎という、京都の呉服商が侍格で取り上げられていまして、朝廷方、各藩の動きを探って窪田平兵衛に説明しました。窪田に京言葉は分かりませんから、寺田喜三郎が重要な役割を果たしていたんですね。

北陸鎮撫使が高田へ到着すると、国元家老の溝口半兵衛は「かしこまりました。官軍に協力します」という請書を出す。有栖川宮熾仁親王が大総督となった東征軍が江戸城へ向かうのに新発田藩も400名余の兵を出し、どこを守ったかという詳細が古文書で残っています。4月15日には上野の山で彰義隊と戦闘が起こり、彰義隊はたちまちやられます。この時江戸に店を出していた大倉喜八郎が東征軍、つまり官軍にどんどん武器を供給していました。

同盟軍の動きと新発田

この頃国元では会津藩から金を出せ、何を出せとさまざま難癖をつけられており、新発田藩はこれを官軍に報告しています。すると大村益次郎（日本陸軍の創設者で靖国神社九段坂に銅像が祀られている方＝図6）は、この時の彼の指示は「もうすぐ官軍が新潟湊に着くから、それまでは我慢しなさい」というものです。官軍による江戸攻めには400余名の藩士が参加していますからね。

東北諸藩は、当初は会津を許してくれということでしたが、西郷隆盛は許さなかった。それで会津と、米沢、庄内、仙台は立ちゆかなくなると戦争準備を始めていきます。仙台藩の玉虫左太夫（図7）等が、新発田へ強談に来るんですね。既に新発田藩が官軍に兵を送っていることを知っていると思いますが「我々に加担しなかったら新発田を火の海にしてやる」と…。米沢藩若家老の甘粕継成等も新発田藩へ兵を出します。

太夫浜に官軍が着くのが7月24日ですが、その前の40日間、新発田町は同盟軍の大砲に囲まれてどうしようもなく、溝口半兵衛の父、半左衛門が「仕方ないから」と200人の藩士を連れて長岡戦争に参加する。

当時の若家老の思いを書き留めた日記があります。長岡戦争に兵を出すことは今後の新発田藩に汚点を残すから、いっそ東北諸藩と戦った方がいいという考え、先代藩主の直薄は安易な行いはやめろと諫めるなど、当時の苦悩が書き記されています。

一方、西郷隆盛側近の吉井友實（図8）と、新発田藩の窪田平兵衛は密接に話し合いをしています。

この時一番強硬に出たのは米沢藩の甘粕継成です。新発田藩主を下関へ連れて行って人質に取ろうとした。最近出版された『東北の幕末維新』（吉井弘文館）で米沢藩の動きが克明に記されています。

12歳の藩主直正が下関へ向かおうとすると、領民が行くなと止めるんですね。行けばもう同盟軍の言いなりにならざるを得ないと。それで下関までは行けずに清水園に入る。当時の家老

たちは偉^{えら}かったですね。人質^に取らせなかった。

米沢藩は上杉ですから、越後は上杉の旧領です。長岡戦争で勝ったら米沢が越後を支配するっ
てはっきり書いてあるんですね。だからまず新発田を味方につけると、甘粕日記に書いてあります。

官軍としての戦争

そうこうするうちに官軍が太夫浜へ上陸し、当時 18 歳^{さいおんじきんもち}の西園寺公望が新発田に入ります。
山県有朋^{やまがたありとも}はおよそ 1,000 名を新発田城に入れて会津攻撃に備える。長岡戦争に行っていた 200 名は
「なんか新発田で大変なことが起きたから行かねばね」と、そういう伝達があったものですから、
米沢藩は「逃げる気か！」といぶかしく思うのですが、「行かねばね」と新発田へ戻ってくる。

ですから新発田藩は、同盟軍に入り長岡戦争で 29 名も亡くなっていますが、本筋は官軍、気
持ちも官軍なんですね。その後新発田藩兵は会津・庄内攻めに参加し、角石原の戦い、当時会
津領だった赤谷口で戦う。角石原は大変な激戦で、石碑が建っています。

会津兵は先込めの旧式銃でも戦う、官軍はスナイドル銃。持っている武器が違うので会津藩
兵はもうだめなんですね。その武器の供給は大倉喜八郎がやっていた。窪田平兵衛の日記に一
度だけ大倉屋栄吉が訪ねてきたという記述があります。栄吉は喜八郎の従兄弟^{いとこ}です。

両軍に兵を出したものだから、官軍の仁和寺宮嘉彰親王^{にんなんじのみやしあきしんのう}が大將軍として柏崎にいたところへ、
溝口半兵衛が 11 代藩主を連れて謝りに行きました。溝口半兵衛の記録では、みんな分かっている
から許すよということで、藩主の先導で仁和寺宮が新発田に入ります。9 月の 16 日のことで、
官軍に協力したとして菊の御紋の旗ももらっています。

西郷隆盛は庄内攻めのために新発田藩に百数十の漁船を用意してくれと求めたことも記録に
残っています。明治 7 年には有栖川宮熾仁親王^{ありすがわのみやたるひとしんのう}（図 9）のもとへ、新発田藩のはる（栄）姫（図
10）という人が嫁いでいます。親王の最初の奥さんは水戸のお姫様でしたが、亡くなって後妻
に入った。はる（栄）姫は後に熾仁親王とともに日本赤十字に非常な貢献をしました。豊田神
社には熾仁親王が書いた扁額^{へんがく}が今もあります。

当時の新発田藩の家老たちは、大変な苦悩の中で新発田を火の海にしないため、裏切りと言

われても仕方ない苦悩の判断をした。山県有朋^{やまがたありとも}が指揮した長岡戦争は、官軍が負けるかもしれ
ないという切ない状況だった。新発田出身の大倉喜八郎は最新の武器を供給。新発田藩は官軍
に協力。新発田が戊辰戦争を官軍の勝利に導いたと言っても過言^{かごん}ではないと思います。

明治 11 年に明治天皇が御巡幸^{ごじゆんこう}に来ます。そのとき新発田に泊まって新発田兵營閱兵式^{えいべいしき}に臨み、
戊辰時に活躍した家老たちも式場に参列しております。



図 1 窪田平兵衛



図 2 在京中公私留書

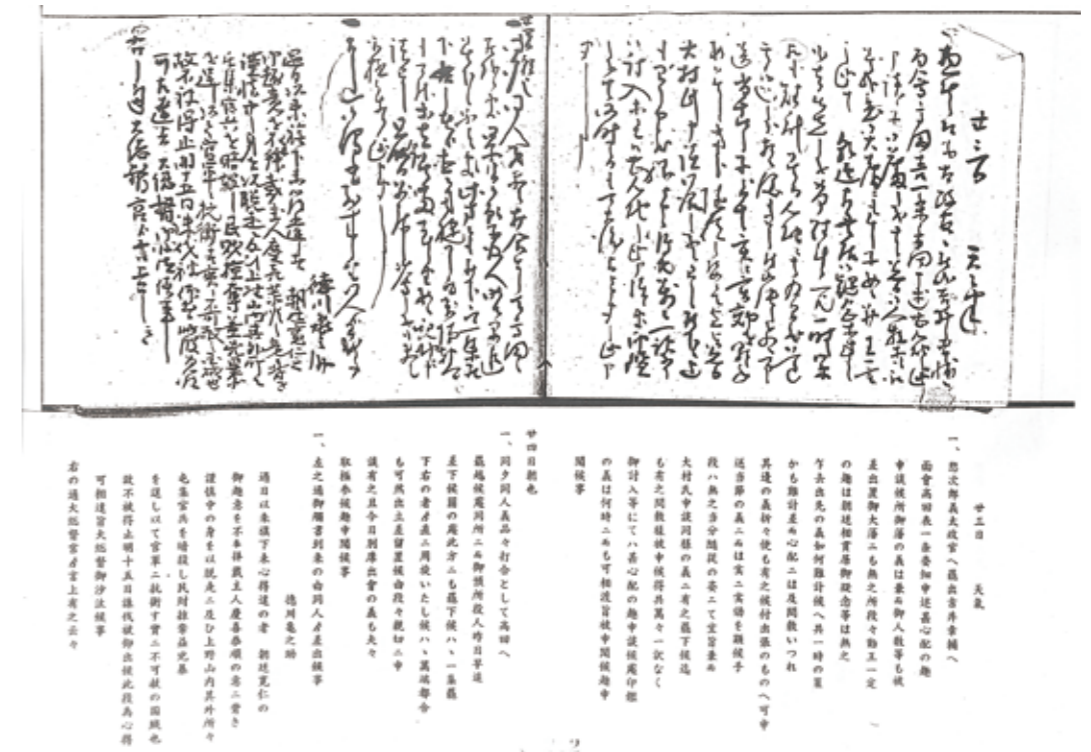


図 3 在京中公私留書と現代語訳



図4 溝口伊織



図5 溝口半兵衛



図6 大村益次郎



図7 玉虫左太夫



図8 吉井友實



図9 熾仁親王



図10 王妃董子(栄姫)



四つのテスト

言行はこれに照らしてから

- 1 真実かどうか
- 2 みんなに公平か
- 3 好意と友情を深めるか
- 4 みんなのためになるかどうか

ロータリーの目的

ロータリーの目的は、意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを育むことにある。

- 第1 知り合いを広めることによって奉仕の機会とすること；
- 第2 職業上の高い倫理基準を保ち、役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し、社会に奉仕する機会としてロータリアン各自の職業を高潔なものにすること；
- 第3 ロータリアン一人一人が、個人として、また事業および社会生活において、日々、奉仕の理念を実践すること；
- 第4 奉仕の理念で結ばれた職業人が、世界的ネットワークを通じて、国際理解、親善、平和を推進すること。

◎ 国際ロータリー 2025-2026 年度テーマ

「よいことのために手を取りあおう」(UNITE FOR GOOD)

RI 会長 フランチェスコ・アレツォ

◎ 国際ロータリー第 2560 地区 運営方針

「ロータリーで善の循環を」

国際ロータリー第 2560 地区ガバナー 室賀 信宏

新発田ロータリークラブ基本理念

私たち新発田ロータリークラブは友好・調和・連携を礎として四つのテストを実施し社会に貢献する。

新発田ロータリークラブ基本運営方針

「承前啓後」ー 歴史を引き継ぎ未来を開くー

新発田ロータリークラブ 2025-2026 年度会長 田上 正幸